
蛇神

ヒノエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇神

【Nコード】

N7485J

【作者名】

ヒノエ

【あらすじ】

「だから教授、あなた靈感ゼロでしょう!？」

蛇神の呪いを受けた、苦労性の靈感青年と、何も見えてないくせに、幽霊妖怪大好きな変人教授が繰り広げる、ドタバタ民俗学コメディ。

第1話「幽霊ゼミ」

港東大学社会学部社会人類学科の八幡ゼミは、通称を「幽霊ゼミ」という。

この由来には諸説あった。

- 一、まるで学生が集まらないから。
- 二、担当教授が研究に熱中すると、死人のような形相になるから。
- 三、ゼミの研究テーマが民俗学だから。

どれも間違いではない。一般人に対する回答としては。だが、藤谷悠介は本当の理由を知っていた。

四、研究室に幽霊が出るから。

そう、誇張でも比喻でもなく、「幽霊ゼミ」とはつまり、「幽霊の出るゼミ」のことなのである。

「ちくしょおお！ もうやってられっかあああっ！」

その八幡ゼミで、藤谷悠介は絶叫していた。

「あはは、先輩また見ちゃったんですか」

悠介の隣で平然と茶をすすっているのは、法学部の戸塚明人。ゼミ生でもないのに、何故か居着いてしまった変人である。

こいつの前世は座敷わらしか家鳴りに違いないと、悠介は確信していた。

「見ちゃったも何も、いるんだよ。ここには。うようよと。アレが！」

「へー」

悠介は脱力した。

「だああ、おのれ、靈感ゼロ體質め。

見る。そこかしこに魑魅魍魎やら小鬼やら通りすがりの自殺霊やらが、ひっきりなしにわめいてやがるんだ。

普通はな、気付くぞ？ どんな鈍感人間でも、何かいるかな、ぐらいは感じるぞ」

「八幡教授も感じてないみたいですけど」

「……っ！」

そうなのだ。ここの主人である八幡教授が、これまた輪をかけた鈍感、鈍感、超鈍感！

鎌鼬に足を切られようが、ろくろ首にうなじを舐められようが「ああ、いい天気ですねえ」とのたまう　　言ってしまうば、万年脳天小春日和。

憤怒の表情で仁王立ちする鬼を背後にしながら「えー、では今日はマヨヒガについて、学んでみましょうか」と講義を始めた時は、こっちの命がいくつあっても足りないと思い知らされた。

後で必死に鬼に謝罪して、東北に帰ってもらったのは悠介だったのだから。

つまり、そんな教授に「幽霊や妖怪が出るから、部屋を変えてください！」なんて頼めるだろうか、否、頼めない。目に見えない物の存在を前提に、部屋を変えろだなんて。

逆の立場なら、悠介とて鼻で笑っている。

でも、でも……っ！

「実際にいるんだから、しょうがねえだろおお！」

「あはははは」

悠介は、机の上に両手で叩きつける。

ドサドサドサッ、と資料の山が雪崩を起こした。

周りにいた、小人、のような生き物たちがいつせいに散っていく。
まるで蜘蛛の子を散らしたみたいだ。

いや、いっそ、蜘蛛であれば良かったのに。

悠介はじっと、紙の束を睨み付けた。

「……これ、誰が片付けるの」

「そりゃあ、先輩でしょう」

「……ですよー」

泣く泣く、悠介は資料を拾い出した。

もちろん、その間、教授や戸塚に対する罵詈雑言をつぶやくのも
忘れずに。

「ん？」

第2話「七不思議」

何枚目かの資料に目が止まった。
タイトルはこうだ。

「港東大学における七不思議の変遷？」

「え、なんですか、それ」

「いや、なんか、学生のレポート、というか、レジュメか。みたいだけど」

「ウチの大学にも七不思議なんてあるんですか？」

戸塚が興味を持ったのか、覗きこんでくる。

読むのも面倒なので、レジュメを丸々渡した。

「あ、これなんか面白そうですよ。えっと、社会学部の八幡教授の研究室には、座敷わらしが住み着いている……」

悠介は沈黙を守った。

つつこんだら負けだ。

「あー、靈感あるの、先輩だけじゃないみたいですね」

「まあ、いるのは座敷わらしじゃなくて、貧乏神だけだな」

だから、一向に幸が訪れないのだろう、教授には。

「他には あ、これ知ってます。受験に失敗して、飛び降り自殺した女の幽霊」

「ベタだなあ」

「勝手に鳴りだすピアノ、開かなくなる奥から二番目のトイレ、深

夜トラックを走る陸上部の幽霊」

「もうちょつと個性的なのはないのか」

「そうですね。あと、二十個ぐらいあるんですけど。全部読みます？」

「あー、あと二十……七不思議なのに!？」

「これ、ここ十年くらいのデータ、集めたみたいですね。時代毎に結構内容が変わっていくみたいですよ」

ほら、見てください、と戸塚が指をさす。

「さっきのトイレの話、五年前だと体育学部の変更室横トイレの設定ですけど、翌年には理学部の実験棟のトイレになってます」
「たった一年で？」

ふと悠介は戸塚の指の下に、何かメモ書きされているのを見付けた。

指をどかして覗き込むと、教授の字で「工事？」と記されている。

「工事、か。確か何年か前に、体育館周辺を改装したばかりだって聞いたことがある」

「きつとそれですね。トイレ、ピカピカになっちゃったから、幽霊が出る雰囲気じゃなくなっちゃったんでしょう」

「雰囲気ねえ」

じゃあ、新しい建築には一切アレが出ないのかよ、と悠介は心の中で毒づく。

「ま、いいさ。どうせ七不思議なんて、九分九厘デタラメなんだから。それより、教授がそろそろ帰ってくる時間だぞ。俺は茶を淹れるから、お前は机の上、片付けといてくれ」

さりげなく部屋の片付けを戸塚に押し付けると、悠介は部屋を出ようとする。

「あ、先輩！」

「なんだよ、お前が茶を淹れてくれるのか？」

「そうじゃなくて、教授が」

「教授？」

ぶみ。

と、悠介の足が、柔らかいもの踏みつけた。

「え」

恐る恐る、悠介は下を向く。

そこには、白い布にくるまった暖かい肉の感触。つまり

死体？

「ぎゃああああっ！ 死んでる！？」

「死んでません、教授です！」

「き、きよ、教授？」

第3話「桜と死体？」

ゆっくりと足をどかすと、白い青虫 失敬。白い教授は、もそもそとうごめいた。

「んー」

と、眠た気な声をあげると、布の隙間からもそもそと手と顔を出す。

孵化した。教授が孵化した。

「あ、あの、教授」

「はい？」

ようやく起き上がったものの、教授はまだ覚醒しきれていないのか、うつろな目で悠介を見上げる。

「藤谷、君？」

「あ、はい。藤谷です」

「おはようございます」

「おはようございます……じゃないです、教授！ もう、五時過ぎですよ」

「あれ、そうなんですか」

「そうなんです」

悠介の返答に教授はしばし考えこむ。

「そうですか。それは」

「はい」

「おはよう、ではなく、こんにちはですね」

これで正解でしょ、とでも言いたそうに教授は笑う。
もし、これが小学生の女の子だったら、確かに、頭をなでて「うん、こんにちは」って微笑み返すのもありだろう。

だが！

五十を過ぎたオッサンに誰が、微笑むかあつ！

「教授、今日の講義はどうしたんですか。四限、あつたはずですよ
ね」

教授の肩をつかみ、無理やり視線を合わせた。
悠介の勢いに驚いたのか、教授はきょとんと目を丸くする。
よく見ると、纏っていた布はカーテンだった。

「講義はですね。今日は天気良かったので、皆さんで花見をしましょうと思ひまして」

「花見？」

背後で戸塚がゲラゲラ笑っているのが聞こえたが、今は気にしない。
い。

「はい。確かに花見は今でこそ宴会の一種になってしまっています
が、古来は農作物の豊穡を占うものでしたから」

「あ、いえ。それは知ってますけど……どうしてそれがこんな所で
寝っ転がることに」

「それはですね。桜を見てきたんですが、誰かが桜の木の下には幽
霊がいると言ひ出しまして」

戸塚が会話に入ってくる。

「あ、はい！ 俺、それマンガで読んだことがあります。あと、死体が埋まってるやつもありますよね」

第4話「カーテンの理由」

「死体はともかく、幽霊云々は柳と混ざってないか？ それに死体の方も、元ネタは安吾だか基次郎だかの小説だった気がするし」

教授は、ほう、悠介を眺めた。

「藤谷君は柳といえば幽霊なんですね。私などは、どじょうの方を思い浮かべてしまうんですが」

「え、どじょう？」

戸塚が問い返す。

興味を示してくれたのが嬉しいのか、教授の表情がパツと明るくなった。

「はい、柳の下に二匹目のどじょうはおらぬといいまして」

しまった、このままではミニ講義が始まってしまう。

「だああ！ 話は後で！ 戸塚が！ たつぷりと聞きますから、今はなんでここで寝てたのか、教えてください。まさか、学生ほっぴり出して寝てたわけじゃないんでしょう？」

戸塚が、の部分を強調して言うと、背後で「先輩……」という呟きがしたが、聞こえないふり聞こえないふり。

「ああ、そうですね。確か」

「桜の下に幽霊が出る、までは聞きました」

「そうですね。桜の下なら幽霊が出るかと思ったんですが、やは

りこんな大勢では幽霊も出にくいかと思ひまして」

「は？」

「学生さんには、早めに講義を切り上げて、帰ってもらったんですが、私、一目幽霊を見たいと思ひまして」

「はあ」

「十分ほど待つてみましたが、現れては頂けないようなので、私の姿が見えているのがいけないのだと思い、何か身を隠すものはないかとここに戻つてきたのです」

「……まさか、そのカーテンは」

「はい。なかなか適当な物が見当たらず、苦労しました」

教授は自慢気に語る。

「もしやとは思いますが、その、カーテンを見付けて、そのまま、ご就寝なさり、ました？」

変な日本語になつてしまった。

教授は苦笑する。

「年は取りたくないものですね。つい気持ちよくてうとうとしてしまいました」

つまりだ。

要約すると、この人は幽霊が見たくて、こっそり隠れようとしたけれど、身を隠す物を探している内に眠くなつてしまい……。

阿呆か。悠介は何故だか泣きなくなつた。

第5話「幽霊ホイホイ」

教授は窓の外を見てつぶやいた。

「もうすぐ黄昏時ですね」

「はあ」

「あ、よろしければ藤谷君も、一緒にいかがですか？」

相変わらず、会話に脈絡がない。

が、教授のことだ。おそらく、アレが諦めきれないのだろう。

「なんとなく想像は付きますが、何にでしょうか」

「幽霊見」

「ダメです」

悠介は即答した。

「まだ言い終えてないんですが……」

「ダメったらダメです。教授、神在祭の資料まとめも、学生レポートの採点も終わってませんよね」

「う」

「幽霊は待つてくれますが、締め切りは待つてくれませんよ」

「うっ」

「また教授会でいびりたいんですか。給料分働かないのは、泥棒ですよ」

「うっうっ」

悠介は教授の首根っこをつかみ「はい、ひとまず顔を洗ってさっぱりしましょうか」と、部屋の外へと引きずっていく。

まったく。

悠介は心の中でため息をついた。

これ以上、幽霊なんぞに関わっていられるか。

そもそも、この研究室にアレがうじゃうじゃた溜まっているのは、立地的な問題もあるが、三割は教授が知らず知らずの内に連れてきてしまったものだ。

河童のミイラや呪いの面などの「お土産」に憑依してる場合もあるが、たいていは教授の背中にひつついてくる。

世の中にはいるのだ。度を越えた、霊媒体質が。

いや、霊媒というよりは誘蛾灯、あるいは……幽霊ホイホイだろうか。

「ヤツら」いわく、教授からはとても美味しそうな香りがするらしい。

その香りにつれられて、一匹、二匹、と増えていき、最終的には百鬼夜行。その姿たるや、まさにこの世の終わりである。

だが、どれだけ目に見えないモノたちにひつつかれようが、教授には何かすごい守護がかけてあるらしく、まるつきり影響がない。よほど強力な相手でもない限り、体に乗っ取られることはまずないだろう。

だから、教授自身は比較的安全だ。

教、授、自、身、は。

その代わり、困るのは周りである。

なまじ悠介のように中途半端な霊感がある者の方が危険だ。

あまりの霊圧に体調を崩してしまったり、生首を見たショックで気絶してしまったり、下手すると悪質なものに取り憑かれたり、と

散々な目に合う。

おかげで、八幡ゼミには一層学生が近寄らなくなるわけだ。バンザイ。

第6話「見えぬ人」

「なわけあるか、チクショー！」

寝ぼけ眼の教授を給湯室に押し込んだ悠介は、廊下で一人悶えていた。

「あの常春のーたりんのせいで、やっと入ってきたと思ったゼミの後輩は、百鬼夜行にて九割脱落。残った一割も、一週間で微熱、腹痛、ポルターガイスト！」

そりゃ、呪われたゼミとも呼ばれるわ。

ハハ、アハハハハ　んにやろうめ！

気付けよ、ゼミの異変に。明らかに異常事態だろうが。

困りましたねえ、じゃないっつーの！

もっと、もっとさあ、他に言うべき事があるんじゃないのか」

「例えば？」

「例えば　そう。今年はインフルエンザが流行っているんじゃないか、とか」

「インフルエンザでポルターガイストは起きないと思うけど」

「あーと、そうだな。皆さん、今年は大凶だったんじゃないか、とか」

「さつきより、論点ズレてきてないか」

「あ？　えーと。だったら　ん？」

はた、と思う。

悠介は今更になって、自分が「誰」と会話しているのか知らない事に気づいた。

体は正面を向いたまま、ゆっくりと首だけ振り返る。

「……………あの、どちら様？」
「その質問遅くね？」

男は呆れたように肩をすくめた。
年はまだ二十歳そこそこ、ラフなパーカーにキャップをかぶっている。

どこにでもいそうな、ごく普通の学生だが、生憎と悠介の記憶にはない。

「只幸成。ただゆきなり 文学部四回生」

「はあ。で、その只さんが俺に何の用で？」

「まずは人が名乗ったのだから、そちらも名乗るのが筋じゃないか？」

只はピシャリと言い放つ。

今時、古風なやつだな、と悠介は妙なところで感心した。

「そうか、悪い。社会学部の藤谷だ。で、ご用件は？」

只は一瞬、明後日の方を向くと、給湯室横の壁を拳でコツコツと叩く。

「ここの御仁に取りなしを頼みたい」

「教授に？ あ、まさか、八幡ゼミに入りたいとか」

「断じて違う」

そう力強く否定しなくても。

悠介はちよつと落ち込んだ。

「詳しくはあとで説明するが、この大学の七不思議の件で相談した

「い事がある」

「七不思議？」

ちょうど悠介が問い質した辺りで、髪から水滴をたらして、ぬらりひょんみたくなった教授が現れた。

「藤谷君、お待たせしました」

「いえ、目は覚めましたか」

「はい。ちよつとスツキリしました」

教授はコクンと首を振る。

確かに、多少は目が覚めたようだ。

悠介は只の方を向くと、左手で紹介のジェスチャーをする。

「ちょうど良かった、教授。こちらの只青年が、教授に相談したいことがあるそうです」

「はい？」

「ですから、この只君が」

「あの、私には、その。藤谷君の隣には、誰もいないよう見えるのですが」

.....え？

第7話「テストに出ます」

悠介は教授と只の顔を、交互に眺める。

冷や汗が流れた。間違いなく、只はそこにいる。いや正しくは見えている。

悠介には見えて、教授には見えない。

自分は見える。

教授は見えない。

それは、イコール？

只が右手を上げた。

「ちなみに、生きてないから、俺」

「それを先に言ええええっ！」

「聞かれてないし」

「聞かれてなくても、言えよ！ とても大事な所デスよ、テストに出ますよ！」

「あ、あの、藤谷君？」

服の裾をつかまれて、悠介は我にかえった。

ああ、どうせなら、可愛い女の子につかまれない
じゃ、なくて！

「もしかして、そこに霊、います？」

「いいえ！ いませんよ、いませんとも、霊なんて。あんなのはフイクションです、架空の存在です、白昼夢です！」

「ですが先ほど、只君とおっしゃる方がいると」

「只君？　ただ……あー、いえいえ！　タダ券、タダ券って言ったんです。昔、親に肩たたき券をプレゼントしたら、十倍にコピーされて、三ヶ月、毎日肩もまされたことがあります！」

「私に相談したいことがあるとか……」

「相談ですか、そう「だ」んです。というギャグです！　自虐ギャグです！」

「……」

教授がじつとこちらを睨みつけてくる。
しまった、今のはさすがに苦しかったか。

「ああ！」

いきなり教授が納得した様子で、手を叩いた。

「そうなんです、と相談をかけた冗談なんですネ」

「……………阿呆で良かったああ。」

本来ならジョークを真面目に解説されるなんて、単にスベるよりもいたたまれないが、今回に限り、教授グツジョブ！

「ご理解頂けたようでなによりです。さ、研究室に戻りましょう。」

道明寺桜餅、買ってきましたから」

「桜餅」

教授がぱつと顔を明るくする。

この御仁は、甘いものに目がないのだ。

「あとでお茶、淹れてあげますね」

「はい。桜餅、いいですねえ」

だらしないほど相好を崩すと、教授は夢見心地で研究室へと向かう。

よし、これではらくは霊について忘れてくれそうだ。

教授のあとを追うすがら、悠介はキツと只を振り返ると、こつ口を動かした。

「あとで、覚えてろよ」と。

只は肩をすくめていた。

第8話「境」

「藤谷君のご出身は関西方面ですか？」

「生まれは徳島ですけど。どうしたんです、いきなり？」

「はあ、なるほど。四国ですか。」

あのですね、桜餅といって、道明寺を連想するのは、関西方面の方が多いそうです。関東では、桜餅といえば長命寺をさすのですよ」

「ああ。以前、青森に出かけた時に桜餅を買おうとしたら、「どっちの？」と聞かれたことがあります。まさか桜餅に種類があるとは知りませんでしたから、つい「普通のを」って頼んじやいました」

教授はふふ、と笑う。

「北海道や東北地方は、昔から関西との交流が多かったですから、食文化も関西流だったりするのですよね」

「そう言えば、聞いたことがありますでしたが、教授のご出身は？」

「私ですか？ 私は家の都合で、あちこちを転々としていましたからねえ。生まれは島根ですが」

あー、島根。神の国、出雲ですか。

なんだってこの人はそう、いろいろ出てきちやいそうな場所に生まれてきちやうかねえ。

「思えば、親に連れられて、日本中を回りましたね。生憎、徳島はまだなんです」

「でしたら、今度の休みは家へいらして下さい。まあ、鳴門の渦潮くらいしか見るものがないんですけど」

「いえ、藤谷君のご実家も気になりますし。ぜひ伺いしたいです」
「まあ、古い寺なんで……大したもんじゃないですが」
「お寺さんなんですか」

教授が興味を持ったようだ。

「では、藤谷君もいずれは住職に？」
「うーん、俺は得度もしてませんからね。親父も後継ぎは、叔父にする気なんじゃないかと思ってるんですけど　ん？」

肩をツンツンつつかれ、悠介は振り返る。

只だ。

悠介は教授に見えない角度で、小声で答える。

「なんだよ」
「今は部屋、戻らない方がいい」
「なんで」
「結界が破けてる」
「……え？」

結界とは、教授があまりにもアレを引っ付けてきてしまうので、急遽悠介が研究室に張った簡単なものだ。

目の荒い網のようなもので、あまりにも小さくて弱い魑魅魍魎レベルなら、隙間からすり抜けてきてしまうが、ある程度の霊体ならシャットダウンできる。

「……相当強いんじゃないや、破けなくらいの強度はあるはずだけど」

「じゃあ、その相当強いのがいるんだろ」
「……」

悠介は考える。

第9話「少女」

「とにかく、今は避難しよう。下手すると、俺程度の能力じゃ対応できない相手かもしれないし」

只もうなずいた。

悠介は、教授をなんとか言いくるめて、外に出る算段をたてる。

「あの、教授」

「大丈夫ですか？」

は？

悠介は一瞬、教授が誰に向かって言ったのかわからなかった。もちろん、悠介自身ではない。教授は悠介に背を向けている。どうやら前方に誰かいるようだ。

悠介は立ち位置を変えて、教授の横から伺った。

「お、女の子？」

そこには十歳程度の少女がうずくまって、泣いていた。

「迷子でしょうか、困りましたねえ」

教授は少女の側に寄ると、優しい口調で話しかける。

「こんにちは、お嬢さん」

「……」

「どうしました？ 迷子ですか？」

少女がこくんとうなづく。

教授は、肩の力が抜けたのか、そつと息を吐いた。

「お父さんとお母さんは？ 近くにいますか？」

「……」

少女は、答えない。

おかしい。

悠介は、眉をひそめた。

というか、なぜ大学に小さな女の子がいるんだ。

食堂や図書館なら、近所から遊びに来たのかもしれないと思うが、ここは研究棟。大学の僻地も僻地だぞ。

まさか教授陣の誰かの子か？

だとしても、どうして自分の研究室か事務室に置いておかない？
変だ。違和感がある。

「おい」

只が声をかけてきた。

「食われるぞ」

誰が、とか、何を、とか、誰を、とは聞かない。

悠介は理解した。

「教授、危ない！」

悠介は教授の襟を掴み、少女から勢いよく引き離す。

次の瞬間、つい今し方教授がいた空間に、銀の閃光が走った。

爪だ。

少女の右腕がいつの間にか、刃物のような長い爪をもつ、毛むくじらのゴツいものへと変わっていた。

あの爪で、教授を切り裂こうとしたのだ。

「ゲ、ゲホッ……ゲウッ」

いきなり後ろから襟を引かれた教授が、首を痛めて咳き込む。

すいませんね、教授、でも今俺が助けてなきゃ死んでましたよ！

「おのれ……」

少女は舌打ちすると、すっと立ち上がった。

「小僧風情が、邪魔しおつて。死にたいか！」

第10話「怒鳴った」

少女はまさに鬼の形相で悠介を恫喝する。

「は！ まあいい。貴様もそれなりに美味そうだ。二人まとめて食らうてやるわ！」

右腕だけでなく、少女の全身がビキビキ筋肉を盛り上げ、人外のものへと変質していく。

あれは、人鬼っ！？

や、やべえええっ！

「教授、逃げますよ！」

「え、うえ？ 藤谷君っ？」

突然のことに慌てふためく教授の手を取って、一気に駆け出す。

「待てい、小童！」

「と言われて、誰が待つかよおおっ！」

「ちょ、ちよっと待って、藤谷君！」

「待ちません！ 待ったら死にます！ 殺されますっつつっ！」

走る、走る、走る。

幸いここは悠介たちの縄張りだ。地の利はこちらにある。

廊下を突きつきり、階段を下る。

背後からドスドスツと、とても少女のものとは思えない足音がするが、今は気にしていられない。気にしたら負けだ。

ああ、振り返りたくないぜ、こんちくしょう！

「教授、まだへばっちゃダメですよ！ 命ある限り、走ってください
い」

「は、はい……っ！」

すでに息を荒げている教授を励ましながら、悠介は一階まで駆け降りた。

そのまま棟の中央にある出入り口へとダッシュする。
勢いのままに、扉に手をかけた、が。

「開かない！？」

鍵がかかっているわけではない。

だが、取っ手がビクともしないのだ。

「まさか」

閉じ込められた、のか。

もしあの人鬼がここを封じたのだとしたら、それはつまりこの研究棟全体がヤツの結界内だということになる。

一部屋を封じるのが精一杯の悠介とは、比べ物にならない霊力だ。

勝ち目が、ない。

まずい、まずい、まずい！

悠介の中に焦りだけが、巡っていく。

「クソ！ なんで開かないんだ！」

「藤谷君、落ち着いてください。もしかしたら警備員さんか誰かが誤って閉めてしまったのかもしれない。他の出口を探しましょう」

「でも教授……！」

「藤谷君っ！」

教授が　怒鳴った。

悠介は呆気に取られた。

あの教授が、怒鳴った。

初めて見た。

驚きが興奮を上回り、悠介も少しずつ頭が冷えていく。

「探しましょう。まだ諦めてはいけません」

「はい……」

「大丈夫、何があっても君は私が守ります」

第11話「地獄の沙汰も教授次第」

教授が悠介の頭に手を置いた。

そこから、じんわりと熱が広がる。

「教授……」

「頑張りましょう、ね」

悠介はうなずく。

普段なら熱くなった教授を収めるのは、自分の役目なのに。
なんだかおかしくて、悠介は苦笑した。

だが、教授は数歩も行かない内に、足を止めた。

「それにしても、いらっしやらないですね」

「え？」

「先ほどの少女です。我々のすぐ後を追ってきていたと思うのですが」

そつえば、さつきから、物音一つしない。

階段を降りた時は、確かに後ろにいたはずなのに。

「そう、ですね。普通ならもう追いついているはず」

「何かあったのでしょうか」

何があつたにせよ、来ないというなら好都合だ。

誰が喜んで食われるかってんだ。

「まあ、いいんじゃないですか。命拾いしたなら、それはそれで」

「だと良いんですが……」

教授は首を傾げる。

行動に理由が見いだせないと、スッキリしないのだろう。
これだから、学者という生き物は困ったものだ。

「今は生き残る事が先決です。ゆっくり考えるのは後でいい」
「それはどうだろうな」

人影が階段から降りてくる。

もしか、人鬼の少女か!?

と、一瞬身構えたが、悠介はすぐに力を抜いた。

「只!」

只は平然と一段一段、下がってくる。

「お前、無事だったのか。あの人鬼はどうなった」
「さあ?」

肩をすくめる只。

「どっか行つたみたいだけど。大方、よそに興味が移ったんじゃないの?」

「教授を放つて? そんなはずは いや、待て。お前、さっき何
て言った」

「さっきつて?」

「ここに来て、開口一番に口にしたセリフだよ」

只は階段を降りきる。少しずつ悠介たちの方へと歩み寄る。

近づくに連れて、悠介はヤツの表情に嫌でも気づかされた。

鼻で笑っている。

只は、悠介たちを嘲りながら、楽しんでいるのだ。

「お前は、「それはどうだろうな」と言ったな。どういう意味だ」

「……さあ？」

「今更シラを切るなよ。何を隠している」

「教える義理はない。 と言いたい所だが、まあ、そのオッサン次第だな」

「教授の？」

悠介は教授を振り返る。

その教授といえば、突然虚空に向かって（教授にはそう見える）話を進めている教え子にどう対応したらよいものか、思案しているようだった。

第12話「戦闘態勢」

「あの、藤谷君。つかぬ事をお聞きしますが、そこに誰かいらっしやるのですか」

「教授……」

悠介は舌打ちする。

本来なら、教授にはこういった事に一切関わらせたくなかった。見えないのなら、知らないのなら、それに越したことはないのだが、今となってはもう遅い。

悠介は、唇を噛み締め、絞りだすように言った。

「……います」

「その方は、幽霊、なんですね」

「はい」

「わかりました」

教授はうなづく。

「こういう事は初めてじゃありません。安心、というのも変ですが、信用してください」

「え……」

「藤谷君は、幽霊を見聞きできるのですよね。私には感知できませんので、通訳をお願いします」

教授は毅然として言い放つ。

悠介は軽い驚きに包まれていた。

初めてじゃない、のか。

考えてみれば当たり前だ。教授のような霊媒体質が、今まで霊に

狙われないはずがない。

そして、いくら見えないからとはいえ、その命、魂を狙われて、何十年も気づかないはずもないのだ。

だが、とそこで悠介は考える。

いくら存在に気づいたとはいえ、何も見えない聞こえないでは対処の仕様がなない。

つまり、いるのだ。

教授には、協力者が。

この手のことに内通し、教授を守護する存在が。

シヨックだった。

なにがシヨックって、その事実衝撃を受けている自分自身がだ。

「……っ！」

バシン！

悠介は自らの頬を叩く。

しつかりしろ！

今は、そんなことどうでもいいだろ！

過去を考えているヒマがあるなら、これからのことを考えろ。

「ふ、藤谷君？」

突然、自分の頬をぶつ悠介を見て、教授は素っ頓狂な声をあげた。

「失礼しました。俺は大丈夫です。通訳ですね、任せてください。」

いいですよ、やってやりますよ。やってやるっじゃねーの」「あ、あの」

「只！」

うろたえる教授を無視して、悠介は只の方に向き直る。

「見ての通りだ。こちらはバツチリ戦闘態勢に入ったぞ。

確か、教授に頼みたいことがあると言っていたな。七不思議の件で」

「ああ」

「聞かせてもらおうか。お前の頼み事とやらを」

第13話「人鬼」

片眉を吊り上げて、只は犬歯をむく。

嘲笑だ。

ああ、やつぱりコイツ、楽しんでやがる。

「七不思議に、夜中トラックを走る陸上部の霊というのがある。知ってるか」

「ああ」

つい先ほど戸塚と話したばかりだ。

悠介はうなずく。

「それは俺だ」

「は!？」

「俺だけじゃない。開かずのトイレ、血溜まりの井戸、深夜流れるベートーベン、引きずり込まれるプール、増える階段 諸々の七不思議に関わる霊たちが、今、大学中を歩き回っている」

「……」

「ま、歩き回るだけなら、大したことないんだけどな」

そう言っただけは只は何故か、右腕の袖をまくった。

「それは っ!」

悠介は驚愕した。

只の右腕は、赤黒い筋肉が盛り上がり、濃い体毛と、長く鋭く伸びた爪が、それが獣のもつものであることを示している。

そう、これは。

「鬼の腕!？」

「ああ」

「お前、人鬼なのか!」

只は袖を元に戻す。

「正確には、なりかけ、だ。今はなんとか右腕だけに抑えているが、保って今日一日だろうな」

悠介には、言葉も出ない。

鬼、というのは、一般的には頭の角や金棒、虎柄のパンツを履いた妖怪の一つだと思われるが、それは鬼の一部でしかない。

もともとは、鬼の語源である「隠^{おぬ}」という字からも分かるように、目の見えないものの総称だ。それが転じて、この世ならざる力の持ち主、異界からの来訪者、もたらされた災厄などを意味するようになった。

西洋でいう「悪魔」と似たような概念だ。

要するに、なんかよく分かんないけど、強い力を持った悪者は、まとめて鬼扱いなのである。

そんな鬼には、当然種類がある。

仏教系、神道系、中国系、いろいろあるが、人鬼は中でも、最も身近な鬼だ。

人が、鬼と化したもの。

一言でいえば、それが人鬼である。

憤怒、未練、絶望、後悔、嫉妬、執着、欲望　そういった感情が暴走し、やがて肉体が強固なものへと変質し、最終的には人外
存在となる。

化け物だ。

始めは人間だろうが、完全に鬼と化してしまえば、理性も何もない。

ただ、感情のままに破壊と殺戮を繰り返す化け物なのだ。

悠介は身震いした。

只は言った。

「俺だけじゃない。諸々の七不思議に関わる霊たちが、今、大学中を歩き回っている」と。

おそらくは先ほどの少女も、元は七不思議に出てくる霊か何かだったのだろう。

もし、その霊が……ことごとく人鬼と化したとしたら。

それらが、突如人を襲ったとしたら……っ！

第14話「信頼」

「な、なんだって、そんな事に……!？」

もし、それが本当なら、大パニックだ。

大勢の被害者が いや、下手すれば死人が出る。

霊が突然凶暴化して人を襲うだなんて、前代未聞だ。マンガの中じゃないんだぞ！

ついさっきまで、あれだけ平穏な世界で暮らしていたはずなのに、それがどうしてこうなったんだ？

「知るかよ。俺だって気持ちよく走ってただけなのに、突然地縛を外されて、いい迷惑なんだ。オマケに人鬼なんぞに変化だと？ 不愉快極まりないんだよ。

だからだ」

「あ？」

「こちらも、自分の身を守るために情報が欲しい。ここに来るまで大学中を見て回ったが、実体化してたのは七不思議の霊だけだったからな。今回の騒動が、七不思議に関係してるのだけは間違いないが俺も、全ての話を知ってるわけじゃねえんだ。曖昧な噂も多いしな。

で、思い出したのが、その教授様だ。何年か前に、論文を書くだのなんだので、学生と一緒に調べに来てたはずだ。

だから、七不思議について知っている情報を全てよこせ。代わりにこちらが知る情報も渡してやる。それが俺の要件だ」

只はキャップをかぶり直し、一息つく。

「この条件飲むか、飲まないか、すぐに決める。時間はないぞ」

「分かった。教授に聞こう」

只がうなずく。

悠介は教授に向き直る。

「すみません、教授。時間がないので手短かにいきます。七不思議について」

「いいですよ」

「え」

「時間がないのでしょうか。詳しい説明は後で結構です。藤谷君の判断で、動いてください」

「教授、しかし」

「私は君を信用しています」

その言葉が、心に深く突き刺さる。

「大丈夫。今は、最善を尽くしましょう」

教授の目は真剣で、俺じゃ判断できないとか、自信がないとか、そんな弱音、とても吐けなかった。

いや、吐けないというのは、少し違う。

この信頼に応えなくては。

その想いに、弱音なんか吹き飛ばされてしまったのだから。

「はい、ありがとうございます」

教授が笑った。

この返答は、合格点だったみたいだ。

「では教授。この大学の七不思議に関するデータが欲しいんです。以前、調べていたそうですね」

「はい　ですが、詳しい資料は研究室ですので、取りに戻らないと」

う、と悠介は喉でうなる。

研究室はこの棟の四階最奥だ。最も出入口から遠い場所にある。

結界は破れてるし、さっきの人鬼の少女とまた鉢合わせる可能性もあるし、あまり戻りたくはないんだが　仕方ない。

「分かりました。すぐに行きましょう」

只が横から現れる。

「話をついたな」

「ああ、条件を飲もう」

「そうか。ただ、分かっていると思うが、研究室に戻るなら気を付けていけよ　あそこも七不思議の一つだったはずだからな」

第15話「三枚の鱗」

え……？

カチ、と悠介の頭の中で、思考の歯車が噛み合った。
身体が緊張し、心臓が鼓動を速くする。

「なんだって……」

階上へと向かう歩みを止めた。
口元に手を当て、かぶりをふると、悠介はゆっくりと、記憶を呼び戻した。

あ、これなんか面白そうですよ。えっと、社会学部の八幡教授の研究室には、座敷わらしが住み着いている……。

今は部屋、戻らない方がいい。結界が破けてる。

言葉がつながる。

悠介はハッとした。

「……しまった！」

バカか、俺は！

研究室には、まだ戸塚が残っているじゃないか！

戸塚は教授と同じく、霊や妖怪を感知できないタイプだ。

七不思議の霊が凶暴化したとして、そこで真っ先に狙われるのは

！

「ああ、クソ！　なんで気付かなかったんだ」

悠介は乱暴に頭をかきむしる。

自分の無能さに腹は立つが、今考えるべきはそれじゃない。

「教授！　ここで待っていてください！　すぐに戻ります」

「藤谷君！」

悠介は教授に向かって、小さな巾着袋を投げつけた。

教授が恐る恐る、中身を取り出す。

プラスチックのような薄い楕円形のものが三枚。

「これは……鱗？」

「出来れば使いたくなかったんですが、この際仕方ないです。少しでも異変を感じたら、その鱗を思いっきり噛んでください。一枚につき、効果は一回ですから」

「え、あの」

「本当にすぐ戻ります！」

悔しいが、説明する隙が惜しい。

悠介は呆然とする教授を置いて、階段を駆け上がった。

ああ、畜生！

何もかも後手に回っている。

本当は教授だって、一人にさせたくない。

だが、あの基礎体力皆無の教授が四階まで上がるのを待っていたら、戸塚の命がもたないかも知れないのだ。

だああ、次から次へと問題ばかり起きやがってえええっ！

第16話「異常ということ」

階段を駆け登りながら、悠介は考える。

だいたい教授といい、戸塚といい、どうしてあそこまで鈍感でいられるんだ。

いや、いつそ鈍感を通り越して不感だ、不感。

普通は、どんな人間でも靈感ゼロだなんてあり得ない。たとえ霊が見れなくても、嫌な雰囲気だとか、寒気だとかぐらひは感じるものなのだ。

ただ、たいていの人間は霊と結びつけていないから、気のせいだと流してしまうだけで。

だから、彼らが本当に靈感ゼロというなら、それは「異常」なのだ。

そう、下手に靈感が強い人間などよりも、よっぽど。

一は努力次第で、十にも百にもなる。

だが、いくら努力しても、一はゼロにならない。

まあ、人為的に靈感を封じられていられるというのなら、理論上不可能ではない、けれど……。

「ハッ、んなワケ、ないだろ、つての！」

封じるなんて言っただって、それはただの目隠しと同じ事。襲われなくなるわけでもないし、メリットがないのだ。

だとしたら、生まれつきの特異体質が原因か？

しかし、そんなレアな体質が、こんな近くに二人もいるものだろ

うか。

「ああ、もう、ワケ分かんねえ！」

悠介は必死に喘ぎながら、悪態をつくことだけは忘れない。

「エレベータ、くらい、つけろってんだ、この野郎っ」

ダン！

と最後の段を強く踏み締め、悠介は四階にたどり着く。

研究室は廊下の突き当たり、最奥だ。

念のため、教授に渡したものと同じ鱗を手に握りながら、慎重に、かつ素早く奥へと進む。

「あ……」

近づくにつれて、見えてくる。

八幡教授の研究室に張った結界の 残骸が。

「ひどい」

蜘蛛の巣のように四方に張り巡らせていた銀系の網は、見るも無惨に引き裂かれていた。

よく見れば、破れている箇所周辺が、うつすら焦げている。

よほどの負荷がかけられた、ということか。

無事だろうな、戸塚。

これで死んでたら心配し損じゃねえか。絶対、末代まで呪ってやる。

第17話「音の無い激動」

「うう……」

部屋の中から、うめき声がした。

「戸塚！」

まさか、怪我をしているのか！？

悠介は鱗を口端でくわえて、片手で早九字の印を切る。

「大丈夫か、すぐに」

しかし、室内に駆けこんだ悠介が見たのは、予想外の光景だった。

何も、いないのだ。

あれだけ、うじゃうじゃいたはずの魑魅魍魎たちが全て消え失せ、静謐とさえ称することが出来るような、シンと冷え切った空気に包まれている。

例えるなら、そう、掃除されてしまったかのように。

「一体何が……」

荒れているなら分かるが、綺麗になっているだなんて信じられない。

それもあの短時間で。

どれだけ優秀な被い屋とて、百はくだらない魑魅魍魎を全て被う

には、一時間はかかるはず。

藤谷家、有史以来の天才と呼ばれた悠介の姉でさえ、四十分強はかかるだろう。

しかし、悠介と教授がここを離れてから、まだ二十分程度しかたっていない。

「あ、ぐ……」

足元で声がした。

入り口から死角の位置にいたため、気付かなかった悠介が、ハッと我に帰る。

「お前！」

倒れていたのは、先ほどの少女だった。

「小僧、か……」

右腕と左足を失い、痛みにつめいている。

死人だから血は出ないが、もし生者であれば、出血多量でやがて死に至っただろう。

「ど、うしたんだ、お前。体、ボロボロじゃなか」

いくら人鬼とはいえ、少女の形をしているだけに、その姿は痛々しい。

「どうした、だと？ しらばっくれ、おって。アレはお前の、仲間ではない、のか……」

「アレ？」

「異を食む、者だ」

イヲハムモノ？

何だ、それは。

「知らん、のか……？」

「あ、ああ」

少女は自嘲気味に笑う。

その笑みすら、弱々しい。

「まあ、いい。どうせ、今の私では……お前程度にも、勝てる、まい。殺すなら、殺せ」

「こ、殺せったって」

悠介は戸惑う。

敵として襲いかかってくるなら、反撃のしようもあるが、こんな死にかけの少女相手に攻撃するなんて、確実に寝覚めが悪い。

「早く、しろ……ボンクラ！ これ以上、生き恥を、晒させる気かっ」

「ボンクラ?!」

「うすのろめ。貴様、それでも、男子おのこか……っ！」

「ちよ、ちよっと待てよ！ いきなり何言って」

しかし、悠介のセリフを遮るように、背後から男の声がした。

「ソレの言う通りだぜ、坊や。さっさと滅してやるのが、慈悲ってもんだぞ」

第18話「黒ずくめ」

慌てて悠介は振り返る。

三十代後半ぐらいのオッサンが、壁に寄りかかって立っていた。黒のタートルネック、黒のスラックス、黒の革靴に黒いポニーテールと、完全に黒ずくしだ。なまじ顔は悪くないだけに、余計胡散臭い。

「な、何ですか、アンタ」

「ん？ 國宏から聞いてないのか」

「くにひろ？」

「八幡國宏。坊やんとこの教授様だよ」

「ああ、教授の……」

やはた、くにひろ。

八幡、國宏。

八幡國宏教授！

「え、きよ、教授のお知り合い、ですか!？」

「おいおい、自分んとこの教授の名前くらい覚えておけよ」

「い、いえ、その、忘れてたとかじゃなくて……っ」

悠介は急いで釈明する。

そう、決して教授の名前を忘れていたわけではない。

しかし、教授より十は年下であろうこの男が、まさか教授を下の名で呼び捨てするとは思わなかったのだ。

「ちょっと、その、普段教授の名前、言ったりしないので、ピンと

こなくて」

「ふうん？」

両腕を組み、男は上目遣いで笑う。

何もかもわかってますよ、と言わんばかりだ。

「ま、いいけど。考えたら、アイツがそこまで気が利くわけないしな」

「はあ」

「じゃあ、改めて。お久しぶり、藤谷悠介くん。いつも愚息がお世話になってます」

男は細い長身を折って、深々と頭を下げる。

今までの態度から一変した丁寧な動作に、思わず悠介はつられて礼をする。

「あ、いえ。こちらこそ、息子さんにはいつもお世話になってます」

ん？

待て、藤谷悠介。

今のやりとり、実はツツコむ所が山ほどなかったか。

なんで俺の名前、知ってんの、とか。

はじめましてじゃなくて、お久しぶり、とか。

愚息って、息子のことだね、とか。

「……えーと」

どうしよう。どこからツツコめばいいのやら。

「今後トモヨロシクお願いシマス？」

「カタコトな上に疑問形になってるぞ、少年」

男は何が面白いのか、クツクツと肩を震わせていた。

「いやあ、息子って誰の事だぐらい聞かれるかと思ったが、予想外の反応が来たな。……クク、よろしくか。こちらこそ、末永いお付き合いをお願いしたいね」

オッサンはあごひげをいじりながら、こちらを舐めるように覗いてくる。

悠介は思わず後ずさった。

「あ、いや、さっきは勢いで言ってしまったけど、そんなにヨロシクしたいわけでは」

「心の声が漏れてるぞ、坊や」

「あ」

悠介はつい間の抜けた声を出してしまった。

それを見た男は盛大に吹き出す。

「なんか……話に聞いてたのと違うな。結構天然？」

「なんですか、天然って。教授じゃあるまいし」

「はは！ 言うねえ、気に入った。坊やは一見真面目そうだが、実は面倒くさがりで口が悪いんだな」

な、なんでわかるんだ……まだ会って五分もたつてないのに。

第19話「問う者」

「なんでわかるんだ、って思ってる？」

「っ！」

「だからまだ坊やなんだよ、悠介くん」

うつ、何なんだ、この人。

さつきから、相手のペースにさせられっぱなしだ。

亀の甲より年の甲というわけじゃないが、どうにも向こうの方が一枚上手らしい。

これ以上、詮索しようとしても、またあしらわれるだけだろう。
悠介は質問の方向を転換する。

「そうだ！ それより戸塚！」

「戸塚？」

「ここに俺の後輩がいたはずなんです。知りませんか？」

男はポンと手を打った。

「ああ、あき」

しかし言いかけて、男は思い直したように唇をずらした。

「あの子なら、俺が保護しといた。もちろん怪我一つないぞ」

「本当ですか！」

「今頃、俺の研究室でグース力寝てるだろう」

そう、か。

無事、なのか。

悠介は一気に全身の力が抜けた。

「はああ」

今回、戸塚は完全にとばっちりを受けた形だ。

この騒動を予測出来なかったとはいえ、大量に霊のいる場所で独りきりにさせてしまったのは、自分の過失。

それで、万が一アイツに危害が加えられるようなことがあれば、戸塚の家族や恋人に顔向けできないところだった。

「良かった……」

額に手を当てて、大きく息をつく。

これでひとまず戸塚の件はなんとかなった。

「そっぴや國宏はどこだ」

「え？ あ、教授なら、下に置いてきました。　　そうだ、すぐ戻らないと」

「なに」

突如、男の眼光が鋭くなる。

途端に、纏っていた雰囲気張り詰めたものへと変わっていく。

「國宏を一人で置いてきたのか」

「え……」

「アイツが一切、異界の存在を感知できないことは知ってるはずだよな。何故だ」

詰問口調で男はせめてくる。

突然の豹変にたじろいだ悠介は、しどろもどろに答えた。

「え、と。それは、その、時間がなくて。戸塚も危険な状態かもしれないかったし……」

「それで。危険だと知ってて國宏を置き去りにしたのか」

男が眉根をよせる。

これは……本気で怒って、る？

「い、一応護身用の術は施して」

男がこちらに手を伸ばす。

悠介の体がビクっとはねた。

殴られるかと思ったのだ。

しかし、その手は悠介の肩口にそつと触れるだけだった。

「あ……」

男の指先には、透明な鱗があった。

部屋に入るときに、悠介がくわえていたのをいつの間にか落としていたのだろう。

男は鱗をひっくり返しては、まじまじと見つめた。

「……蛇神の鱗か。なるほどな。これを國宏に渡したのか」

「な！？」

悠介の目が驚愕に開く。

第20話「別格」

「これ一枚でも売ればウン百万だろうな。好事家がこぞって買い求めるぞ」

男は挑発的に犬歯を剥いて笑う。

「アンタ……何故、それを」

悠介はたたらを踏む。

蛇神については、一族の中でも、当主や継承者などの極一部しか知らない秘密のはずだ。

ましてや、外部に漏れるなんて　あり得ない。

「何故、それを、か」

男はフツと目を伏せた。

「あまりそういう言い方はしない方がいいぞ。相手に答えを教えるようなもんだからな」

「……っ！」

野郎　カマかけやがったな！

「テメエ……」

「睨むなよ。引つかかるお前が悪い」

「鱗、返せ！ アンタにあげた覚えはない」

怒りに身を任せ、悠介は乱暴に男から鱗を奪い返そうとする。

しかし、男は長身を利用して、ヒョイとその手をかわした。

「なんだよ。國宏にはくれてやったんだろ。ケチケチすんなって」

「教授は別格だ」

「別格ねえ」

吠える悠介に、男はポンポン頭をなでる。

完全に馬鹿にされている。

悠介は全身の血がカツとなり、男の手を払いのけた。

「教授とアンタなんかじゃ、比べものになんねえよ。あの人がいなきや俺は　っ！」

「やめて、おけ……小僧」

ハッと我に返る。

ジーンズの裾を、少女の人鬼が握りしめていた。

「貴様、では、勝てん」

「なんだよ。邪魔すんなよ。俺は今」

「やつだ」

「は？」

「私を、こんな体に、した……のは、そやつだ」

硬直する。

悠介はゆっくりと視線を男に向けた。

「やつは、異を食む、者　人、では、ない」

「な……！？」

人間じゃ、ない？

改めて、悠介は男を凝視する。

たしかに、悠介は大した訓練もつんでいないし、慌てていけばヒトとそうでないモノを見間違えることもある。

しかし、冷静にさえなれば、そんな凡ミスをするわけがないのだ。

もう一度、頭のとっぺんから足先まで、男を見た。

しかし 何度確認しても、人間だった。

「は、失礼だな。俺はれっきとした人間だぜ？ 生まれがちょっと特殊なだけだ。

その点お前と似たようなもんじゃないのか。

なあ、蛇神憑き、藤谷家の御曹司様よ」

第21話「憑き物筋」

憑き物筋。それは、民間信仰の一つで、動物霊などがとり憑いた血筋のことだ。

憑かれた家はその霊を使役して富や力を得る代わりに、周囲に害を与えるとして、忌み嫌われる。

現代では、ほとんど絶えたと言われているが……。

「聞けば五百年ぶりの、「男」の継承者だそうじゃないか。よつぽど蛇神に好かれたな」

「く……」

やはり、コイツ、知っている。

どの程度までかはわからないが、藤谷家について いや、蛇神について知っているんだ。

これ以上、男に飲まれて、不要な情報を渡したくない。

悠介は、拳を強く握りしめた。

「御託はいい。何が言いたい」

フン、と男は鼻を鳴らす。

「お前も運がないよなあ。本来なら、黙ってても藤谷家当主の座が転がったきただろうに。なまじ蛇神に気に入られちまったばかりに、借り腹扱いか。」

継承者なんてのは、要するに体のいい生贄なんだろう？」

「は、勝手なこと言うなよ。」

テメエに何がわかる。今までのどの継承者も、その職務に誇りを抱いて生きてきたんだ。彼女たちは身を呈して、家を守ってきたんだよ。

それを赤の他人にどうこう言われる筋合いはない！」

ふーん、と男は腕を組む。

「じゃ、なにか。お前は継承者になって良かったとか思ってたのか」「っ、それは……！」

イエスと言いたい。

しかし、継承者が蛇神への「生贄」であることは悠介自身否定できない。

言葉を失った悠介に男はたたみかける。

「どうせ、蛇神なんてさっさとくたばるなり、どっかしら消えて欲しいと思ってるんだろ。憑き物筋なんて、今時リスクばっかで、なんのメリットもねえしな」

「……そうだよ。その何が悪い」

「悪かないさ。けどな」

男は凄む。

「もし國宏に押し付けようってんなら、そんな考え、今すぐ捨てろ」「は……」

悠介は一瞬、何を言われたのか、わからなかった。
蛇神の継承問題は藤谷家内で解決すべきことだし、それを他人になすりつけるどころか、話すつもりもなかった。

瞬間、激情が悠介を支配する。

「ふざけんな！ 俺が教授にそんなことするわけねえだろ！」

「だといいけどな」

「どういう意味だよ」

「そのままの意味だけど？」

第22話「ふざけんな」

悠介の視線などものともせず、男は肩をすくめる。

「坊やも知ってんだろ。國宏の異常な憑依体質　　霊の吸引力とでもいうか」

悠介は答えないが、心の中で頷いた。
教授の百鬼夜行は一度見たら、忘れようにも忘れられない。

「アイツは生まれつきああでな。小さい頃から、常に幽霊妖怪に憑きまとわれてきたんだ。

それが何を意味するか、わかるか？」

「……いや」

「孤独だよ」

悠介は意味が分からず、目で男に問う。

「四六時中、大量の霊を憑かせている人間に、誰も好きこのんで近づこうとはしねえんだ。少しでも霊感があればな、見えなくても異質な雰囲気を感じとって、いつの間にか國宏から離れていく。

もし霊感が完全にゼロの人間がいれば話は別だが、そんな人間そこから中に転がっているはずもない。

結果、アイツは孤独になった。自分には全く身に覚えのない理由のせいだな」

「……」

「國宏に近寄る人間が一人もいなかったわけじゃない。だが連中のほとんどは、國宏のその体質目当てだった。

好奇心や研究意欲で近づくくらいなら、まだマシな方だ。

背後霊に操られて無意識に襲おうとする者。

自分に憑いた霊を國宏になすりつけようとする者。

珍しい体質を見せ物にして、金を稼ごうとする者　いろいろだ。

それぞれの目的は違うにせよ、進んで國宏と親しくなろうとする者は、ほぼ間違いなく、國宏のカラダだけが欲しかったんだよ。

だから、俺はお前に問う。

何故、お前だけが、単なる善良な好意から、近づいたのだと言い切れるか」

それだけ吐き捨てると、男は口を閉ざした。

一分の隙も嘘も欺瞞も許さないと、無言で訴える。

沈黙が、悠介を突き刺していた。

いったい、何なんだ。このオッサンは。

怒りとも呆れともつかない感情が、ふつふつと体内を駆け巡る。

渦巻くエネルギーが、発散場所を求めている。

悠介はそれを爆発させぬよう静かに、しかし力強く言った。

「ふざけんな」

次いで、言葉が溢れ出る。

「聞いてりゃ、勝手なことばかり言いやがって。今まで教授にろくな奴が近づかなかったからって、なんで俺までソイツらと同じに扱われなきゃなんねんだよ。

第一、アンタはどうなんだ。

さも教授の味方みたいな口振りだったけど、教授がそんな目に合

ってるって知ってて、何か手を打ったのかよ。

あのさ、俺はアンタが何者かも、教授との付き合いがどれくらい深いのかも知らねえよ？

でもな。

教授がアンタだけのもんだと思うなよ、オッサン」

第23話「対妖怪用結界」

悠介は断言する。

「俺は教授を傷つけない。絶対に」

一秒。

二秒。

三秒。

わずかな沈黙の後、男は前髪を気たるそうにかきあげた。

「絶対、ね」

「ああ」

「若いなあ。言い切っちゃうところが特に」

口調は穏やかだが、馬鹿にされているのは明らかだった。

悠介は奥歯を噛み締める。

「まあ、分かった。坊やがどれだけ事態を理解してないか、がな」

ブチ、と悠介の神経の切れる音がした。

「なん」

「お前は爆弾抱えて生きてんだよ」

反論しようとした出鼻をくじかれて、悠介の怒りが一瞬行き場を失う。

その際に、男は床に倒れている少女の人鬼へと近づいた。

何をするのか問おうとする悠介の前で、男はいきなり予想外の行動に出た。

「な　っ!？」

男は彼女の首を掴み、宙へと釣り上げたのだ。

突然のことに少女は「ヒュウッ」と息を飲み込む。

男から逃れようと必死にもがくが、片手片足では兇戯にも等しい顔がみるみる赤くなって、苦痛に歪んでいく。

「あぐ……っ！」

「お前、いきなり何を　ソイツは関係なかっただろ!？」

男は悠介を一瞥する。

「庇うのか」

「はあ？」

「関係あるうがなかるうが、人鬼なんて化け物、放っておけば人を襲うだけだ。なら早めに退治してやるのが世のため人のためだろ」
「意味わかんねえって！　ソイツに襲われたわけでもないんだろ？　手を離せよ」

男は悠介の言葉に眉をひそめる。
そのままさらに腕の力を込めた。

「ぐっう……っ！」

「やめろ!」

いくら人鬼とはいえ、無茶苦茶だ。

男を止めようと悠介は手を伸ばした。

しかし、男まであと数センチというところで、突如バチィッと火花が飛ぶ。

「イ……ッ!？」

悠介は咄嗟に手を引つ込めた。

ヒリヒリと痛む右手をかばう。

よく見れば、指先が赤くただれていた。

結界、か!？

でも、俺は人間だぞ？

人間相手にここまで物理的に遮れる結界なんて、聞いた事がない。

「効いたな」

男は笑った。

「俺の体には、妖怪どもが気安く触れられないように、結界を張つてある。もちろん、普通の人間には何の影響もない」

「っ、対妖怪用結界!？」

「それが効いたって意味、わかるよな」

「そ、んな、馬鹿な……」

自分は妖怪じゃない。

たとえ蛇神の「加護」を受けているとはいえ、体は百パーセント生身の人間だ。

それともまさかこの体
いうことなのか？

知らない内に蛇神に侵蝕されていると

第24話「パペット」

ドクン！

心臓が跳ねる。

胸の中で消化しきれない衝動がうねりをあげる。

悠介は動揺を隠せない。

眠りについていていた蛇神が、目を覚ましていく。

「力、ハッ」

少女の手が宙をさ迷う。

目の前が真っ赤にチカチカと明滅する。

マズイ！

悠介はとっさに胸をおさえた。

興奮が止まらない。

「や、めろ……」

自分の中で蛇神の力が膨れ上がっていくのがわかる。

熱い。体が熱い。

呼吸が荒れ、血流がうねる。

蛇神が 暴走する！

「ダメだ……蛇神！ これ以上暴れるなっ」

しかし、悠介の声に逆らうように、蛇神が雄叫びを上げた。

出セ、藤谷悠介。オ主デハ、アノ男二八太刀打ちデキマイ。
妾ノ力、使ウガイイ。

「い、やだ……！」

頭がガンガン痛む。

悠介は抵抗するが、蛇神は体の内側から、手を足を絡め取ろうと
してくる。

サア！ ソノ身ヲ妾ニ捧ゲヨ！

「う、あああっ！」

悠介が右手で空をなぎ払う。

バチンッ、と男の結界が弾け飛ぶ。

「何ッ！？」

男は、とっさに身をかばう。

その瞬間、少女は男の手から離れ、そのまま床に落下した。

「ッ、ガハ、ゲホゲホッ！」

ようやく解放された少女は、喉を抑え、大きく咳き込んだ。
しかし悠介にそれを喜ぶ余裕などない。

悠介の全神経は蛇神に抗うことだけに注がれていた。

クク、抵抗ナドスルナ。素直ニ渡セバ楽ニナレルトイウニ。

「うる、せえ！」

強情ナ男ダノウ。嫌イデハナイガナ。シカシ妾ニモ我慢ノ限度トイウモノガアル。

「……なっ!？」

すると、両手が悠介の意志に逆らって、攻撃印を組み始めた。まるでパペットの人形のように、内側から強制的に動かされているのだ。

「蛇神いつ!」

侵蝕されている証として、その腕には赤黒い蛇のウロコが浮かび上がってくる。

これが、全身に回ったら、完全に乗っ取られてしまう!

ハハハ、無駄ヨ!

悠介の右手が剣の形を取り、黒ずくめの男に振りかざされた。

「どわっ!？」

男が気配を察して、左に飛ぶ。

次の瞬間、先ほどまで男がいた空間に、鎌鼬が走った。

金属の棚は左右に切られ、詰められていた資料がズタズタに引き

裂かれる。

「ああ、教授の資料！」

「そんな気にする余裕があんのか、坊や！」

「あれは、遠野の山奥まで行って、教授が五年かけて集めた民話なんだぞ！ そんな言っな！」

ハハハハハ！ 愉快、愉快ジャ、悠介。才主ノ体ハマコト居心地ガヨイゾ！

第25話「左手の陥落」

蛇神が高笑する。

悠介の右手が縦横無尽に振り下ろされた。

疾風が走り、辺りを切り刻んでいく。

「チツ、挑発しすぎたか」

攻撃を避けながら男は舌打ちするが、男が移動すればするほど、傷つける範囲が広がっていく。

「あああ！ あれは恐山の、そっちは御柱祭 ああ、河童のミイラが！」

「頼むから、真面目にやってくれ！」

「俺は大真面目だ！」

もちろん真面目だとも。

研究者にとって、長年の苦勞を重ね、積み上げてきた資料というものは、何よりも大切な宝だ。

まだ単なるゼミ生とはいえ、自分も学徒の端くれ。あんな紙っぺらに教授がどれだけ心血を注ぎ込んできたか、わかっているつもりだ。

「畜生お！」

悠介が悔しさに叫ぶ。

俺のミスだ。

くだらない挑発に乗って蛇神を暴走させたあげく、教授の研究を

傷つけてしまった。

継承者としても、教授のアシスタントとしても失格だ。

男の言葉が否定できない。

俺はこんな爆弾を背負って、教授に近づいていたんだ。

不甲斐なさに唇を噛み締める。

「これ以上、好きにされてたまつかよ……蛇神！」

悠介が吠える。

かろうじて自由の利く左手で暴れ回る右手を掴むと、その指先を自分の首筋に当てた。

「なっ!？」

何ヲ！

男と蛇神が驚愕した。

「人の体をこれ以上弄ばれてたまるか。もし動けば、この首かつ切るぞ！」

強く剣の印を喉元に当てる。

蛇神が力を制御するのがわずかに遅れたため、皮膚が裂かれ、血が一筋流れ落ちた。

オノレ……無駄ナアガキヲ。

「俺の体が欲しいんなら、黙ってる。タダでやるほど安くねえぞ」

蛇神の怒りが沸々とたぎるのを感じる。
灼熱の怒りだ。

しかし、怒りなら悠介も負けてはいない。

「さあ、退け！ 今すぐに」

小癩ナ、藤谷メ……！ ソンナモノ、脅シニハナランゾ！

蛇神が内部から、一層力を強めた。

悠介の左腕にみるみる鱗が広がっていく。

鱗の範囲が増えるにつれ、悠介の指が一本ずつ外されていった。
左腕まで乗っ取られれば、防ぐ手段はない。

「ぐうつ！」

無駄ヲ、ソナタノ体ハ最早妾ノモノ。オノガ無力ニ打チヒシ
ガレテ、大人シク明ケ渡スガイイ。

悠介は歯を食いしばり、必死に耐える。

指はすでに、人差し指と親指が残るのみだった。

「ふざけんな……このままじゃ、教授に合わせる顔がねえんだよ！」

邪魔ジャ！

そして蛇神の怒声と共に、左手が引き離された。

第26話「ひとりでできたもん」

「藤谷君!？」

しかし、蛇神が再び男に攻撃しようとした瞬間、戸口に人が現れた。

「教授!」

必死に階段を登ってきたのであろう、呼吸の荒れた教授が、悠介を凝視している。

蛇神の気がそれ、右手の印がフツと解けた。
そのわずかな油断を見逃さず、男が走る。

「國宏、ナイスタイミング!」

男は一気に戸口へと向かう。
そして教授の横をすり抜けた。

まさか、教授を囷に逃げる気か!？

だが、いきなり男はこちらに向き直ると、後ろから教授を突き飛ばした。

「わ」

教授が目丸くしながら、つんのめる。

「受け取れ!」

「なにいつ!?」

よろめいて倒れかけたを、悠介は慌てて両手で抱き止める。
いきなりの教授の重みに、膝から崩れ落ちた。

「動くなよ、坊や!」

「え」

悠介が顔を上げる。

次の瞬間、顔面を男に掴まれた。

貴様ツ!

蛇神に動揺が走る。

「異界に帰れ、蛇神!」

男の掌が、見えぬ牙となり、蛇神を襲った。
脳内への侵入に、悠介の意識がオーバーヒートする。

コノ、異ヲ食ム者メエエ!

蛇神の絶叫がこだまする。

悠介の記憶は、そこで途切れた。

「ん 藤谷君」

脳みそがズキズキする。

悠介はうめき声をあげた。

「う……」

「藤谷君、良かった。目が覚めましたか」

悠介は少しずつ、瞼を開いていく。ぼやけた視界が、徐々に輪郭を明らかにしていった。

「教、授？」

「はい、八幡です」

「俺……確か、蛇神が」

「大丈夫ですよ。安心してください。」

それより、お茶でも煎れましょうか。頭、スッキリしますから」

「あ、なら、俺が」

つい習慣で、よくわからないまま立ち上がろうとする。それを教授に強くたしなめられた。

「駄目です。君は被害者なんですから。ゆっくり寝てください」

「でも教授、お茶、煎れられましたっけ」

「……」

どこからか、ドワハハハ！ と笑い声がする。

教授は口を尖らせると、声の主を睨んだ。

「誠さん。笑いすぎですよ」

「いや、だって、國宏……お前本当に一人で煎れられるのか？」

マコトさん……？

悠介はぼんやりする頭で、その名を探す。

「失礼ですね。私だってお茶くらい」

「じゃあ、前回煎れたのはいつだ？ 去年？ 一昨年？ 五年前？」

「……半年前くらいです」

「今、適当に言っただろ。ここ半年なら、絶対その坊やが率先して煎れてるだろうからな」

「い、家で機会があつて」

「家なら娘さんがやってるって。誰だつて、茶葉が丸々残ってる茶は飲まされたくないだろ」

むづ、と教授がむくれた。子供みたいだ。

第27話「主人」

「それだけ言うなら誠さんが煎れてきてくださいよ」

「あ？　なんで俺が」

「誠さん」

「……わかったよ」

頭をかきながら、渋い顔して、男は部屋を出て行った。

改めて悠介は辺りを見回す。

教授の研究室だ。まだ気を失ってから大して時間がたっていないのだろうか。特に片付けられた様子もなく、あちこち切り裂かれた惨状が、そのままになっている。

悠介はといえば、来客用のソファに横になっているようだった。隣で教授が心配そうに見つめている。

「すみません、藤谷君。誠さんも多分悪気があってやったのではないと思いますけど……」

「いえ、あの。誠さんって？」

教授が目をしばたかせた。

「ああ、藤谷君は初対面でしたね。今部屋を出て行った男性で、戸塚誠といいます」

「戸塚、誠……」

悠介は首を傾げる。

あれ。どこかで聞いたことないか。

戸塚、戸塚……って。

「戸塚あ！？」

ガバツと悠介は跳ね起きた。

「戸塚って、あの戸塚ですか！？」

「あの、とは？」

「いや、えーと、あの戸塚というか、どの戸塚か迷う程、知り合いに戸塚姓がいるわけではなくて」

大丈夫か、俺。

言ってること、意味わからんぞ。

「えー、俺の友人で法学部の学生の戸塚です」

「ああ、戸塚明人君ですね。誠さんは彼の父親です」

父親。

いや、同じ戸塚姓と聞いた時点で薄々予想はしていたけれど。

似てねー！

あの親子、全然似てねえ！

どうやったらあんな嫌みなオッサンから、戸塚みたいな常識人が産まれるんだ。母親似なのか！？

あ、そういえば愚息がどうか言ってたぞ。

それか！ その事か！

いろいろ勿体ぶりやがって、あの親父いいっ！

「は、初耳です……」

「誠さんは文学部の准教授ですからね。確かに学部の違い藤谷君と会う機会はないかもしれませんがねえ」

准教授、あれがが。

頭がクラクラしてきた。

悠介は軽く頭をおさえる。

「はあ。でも、どうして文学部の人間が、社会学部の研究室にいたんです？ 文学部の校舎とは、結構距離がありますよね」

「誠さんとは、家同士のお付き合いがありますから。よく遊びにきて頂いてるんです」

「それだ」

「は？」

教授が小首を傾げている。

悠介は軽い頭痛を振り払うと、教授に言った。

「先ほどからずっと気になっているんですが、何故教授はあの男に敬語を使うんですか。どう考えても、教授の方が年も地位も上だと思っのですか」

「はあ、でも、あの人は私の主人にあたりますので」

第28話「幼なじみ」

悠介は不快という感情を目一杯表に出しながら、口を開いた。

「……主人？」

「はい」

「戸塚の父親が、八幡教授の？」

「ええ。とは言っても、今やほとんど形式上だけのものですが」

教授はまるで当たり前のごとく答える。

悠介は自分の耳を疑いたくなった。

ああ、頭がズキズキする。

ヤケクソになって、悠介は適当に言う。

「主人、って。あれですか。「ウチの主人たら、ホントもーぐうたらで。家にいても、テレビ見てるか、新聞読んで寝転んでるだけなのよ。山本さん家のご主人なんて、週末には家族でスキーって言うじゃない？　なのにウチのボンクラときたら　」の主人ですか」
「……？」

教授が頭上に疑問符を浮かべている。

悠介はハッと気づいた。

このテの軽口が教授に通じるわけがない。

「あ！　いや、失礼しました」

「あ、いえ。私も思わず聞き入ってしまった」

「へ？」

教授はなにがおかしいのか、クスクス笑う。

「藤谷君がまるで女性になってしまったかのように話されるものですから」

「え、あ、そうですか」

「藤谷君は多才ですね。いつも感心してしまいます」

おばちゃんのモノマネもどきで、こつも褒められても困るんだけれど。

喜んでいいのか、ちょっと反応に困る。

「あ、ありがとうございます」

教授はふ、と目を細めた。

出来の悪い子どもが、ある日予想以上に成長していることに気づいて、なんだか嬉しいような寂しいような そんな大人の表情だった。

「私の家、八幡は代々戸塚に仕える家系なんです。元々は、御庭番のような存在だったと聞いています」

「御庭番、って忍者ですか」

「ええ。とは言っても、武闘派ではなく、もっぱら地域に潜入して情報を収集するのが主な仕事だったようですけど」

悠介は忍者ルックの教授を思い浮かべようとして、失敗した。

「もちろん今では廃業して、一般家庭となんら変わりはありません。ただ、戸塚の家とは、本家が近いこともあって、昔からお付き合いをさせて頂いているんです」

「じゃあ、教授があの人に敬語使ったりしなくてもいいわけですね！」

悠介は思わず、語気を強めて尋ねてしまった。
勢いに押され、教授が目を丸くしている。

「え、ええ。言ってしまうえば、単なる幼なじみですから」

「幼なじみ……」

「藤谷くん？」

何だろう、このもやっとした感。

「わかりました……でも教授は敬語をやめてくれと言ってもやめてくれませんよね」

「理由があるなら聞きますが……」

「言いたくないです」

というか、自分でもこの感情をどう説明していいか、わからない。

第29話「飼い犬」

だって、多分これはいわゆる「嫉妬」とか「独占欲」とかいうやつで。

え、待て。

俺は嫉妬してるのか。

教授に？

いや、違う。あの戸塚父に？

あれ、嫉妬って、どっちにするものだっけ。

いや、待て待て待て！

落ち着け、藤谷悠介。

そもそもおかしい。なんで俺があのおっサンズに嫉妬しなきゃならない。

だって、俺と教授は単なる教師と学生で、それ以上でもそれ以下でもないんだから。

そう、そうなんだけど。

だけど、じゃあ、教授と戸塚父がこれまで通りの関係でいいかって言われると、そうでもなくて。

いや、だってさ、ム力つくじゃん。あのおっサン。

こう、さも「俺の方が教授のこと知ってます」的な態度しくさりやがって。

そりゃ昔から家族ぐるみで付き合ってるや、知ってることも一杯あるんだろっけどさ。

だからって、これ見よがしに「國宏國宏」と連呼すんじゃないっつーの。

こちとら冗談でも、國宏さんだなんて呼べないってのに。

……だから、違うっ！

幼なじみがファーストネームで呼び合ったって、何もおかしくないだろう、俺！

あーもー、わかんねー。

頭グルグルしてきた。

「うつ……」

「だ、大丈夫ですか」

きつとすごい百面相をしていたのだろう。

教授が恐る恐る覗きこんでくる。

「教授」

「はい」

「俺、大丈夫ですか？」

「それは……藤谷君次第ではないでしょうか」

「わからないから聞いてるんです」

「なるほど」

会話のようなそうでないような奇妙なやりとり、教授は真面目に頷く。

「それは困りましたねえ。私には藤谷君の事はわかりませんし、藤谷君も自分の事がわからないとなると……」

うーん、と教授は首をひねる。

「あ、でしたら、私が藤谷君の様子をお伝えするというのはどうでしょう？」

「様子？」

「はい。藤谷君の表情などは、ご自分では見えないと思いますので」

ニコニコと教授は微笑む。

「はあ……では参考までに。今の俺はどんな表情してますか」

「そうですねえ。呆然、というか飼い犬に手を噛まれたような表情をなさってますけれど」

悠介は思いきり眉をひそめた。

「飼い犬？」

飼い犬に手を噛まれるってどんな表情だっけ。

たしか、可愛がってた犬に、いきなり裏切られ

「……」

それだ。

そうだ、それだよ！

自分には懐かなかった飼い犬が、あっさり他人に懐いてしまったときのモヤモヤとか、そんな感じだよ。

そうだ、よくある事じゃなか。

うん、大丈夫だ。

俺はおかしくない。

第30話「異を食む者」

悠介は一人で勝手に納得すると、満足気にならずいた。

「ああ、そうですね。わかりました、そういう事ならOKです」
「？ もうよろしいんですか？」

「はい。大した事ではなかったですから」

悠介は教授に向かって微笑む。

しかし、どこか教授は不安そうな表情を続けていた。

「……教授？」

「本当に無理はなさらないくださいね。誠さんに脳を直接「食われた」んですから。」

藤谷君自身には影響はないはずですけど、気絶するほどの衝撃だったのは間違いないですし」

「……食われた？」

教授は深刻そうにブツブツ唱えている。

「いえ、しかし、もし藤谷君が憑依体となかば同化していた場合は、ヘタをするとな脳になんらかの損傷が残る可能性が」

「ち、ちよつと教授？」

「でも誠さんは先ほど間違いなく食べたと言っていたし、もし完全に憑依しきっていたら、藤谷君の精神ごと食べられてしまった可能性も」

「ま、待つてください！ それ、俺の話ですよね！？ なんか地味に怖いことになってるんですけど」

「え？」

ようやく教授は顔を上げた。
きょとん、と額に書いてある。

「どうかしましたか？」

「どうかって……」

聞きたいことは山ほどある。

が、どう聞けばいいのだろう。

悠介自身、うまく頭の中を整理できないでいた。

髪をぐしゃぐしゃとかき回すと、思い息を吐く。

「とりあえず……食われたってなんですか」

「えっと、そのままの意味ですが」

「俺が？ 戸塚父に？」

「いえ、正しくは藤谷君の中にいた憑依体です」

憑依体？

蛇神のことだろうか。

そういえば、先ほどから妙に大人しい。

「その……憑依体？ が食われたってことですか？」

「はい。誠さん曰わくしっぱだけだったらしいですけど」

しかし、教授は途中で口を噤む。

「あの……もしかして、藤谷君、何も聞いてないんですか？」

「何もが何を指すかはよく分かりませんが、おそらく」

「誠さんのことも？」

「教授に聞くまで名前すら知りませんでした」

悠介はきっぱりと断言する。

事実だから仕方ない。

教授はその返答に口をあんぐりと開けた。

「あ、あの人は……」

大きく肩を落とすと、教授は額を抑える。

「という事は、異を食む者もご存知ないんですね」

「……ああ。なんか、鬼がそんなこと言ってたような気がしますけど。それって何なんですか？」

「異を食む者。漢字では「異なるを食べる者」と書きます」

ああ、異を食む者って、特殊なハムとかじゃないわけね。

「その名の通り、人間とは異なる者　つまり幽霊や妖怪を食べて生きている人間のことです」

第31話「冷たい体」

教授は深刻そうに告げる。

しかし、だから何だと言っのだろう。

「はあ。それはまた、変わった体質の人　　というかゲテモノ好き
というか」

「……驚かないんですか？」

おずおずと教授が聞いてくる。

「驚きませんよ。家も裏家業は被い屋ですから。似たような人間は
何人か知ってます」

とくに姉とか姉とか姉とか。

なんて事を本人の前で言ったら、全裸で縛り上げて路上に放置す
るぐらいはされそうだが。

「そう、ですか」

「そうですよ。まあ、色々あったあとだから、感覚がマヒしてるだ
けかもしれないが」

悠介は教授の肩を叩いて、軽く笑　　おうとした。

しかし、その表情が俄かに強張る。

体が　　冷たい。

まるで死人、とまでは言わないが、温かみがほとんどない。
人間の体温って、こんなに低くて大丈夫なんだろうか。

おかしい。

悠介はふと目の前の教授に違和感を抱いた。

「……」

そうだ、冷静に考えてみれば、そもそも何故ここに教授がいるんだ？

自分は確かに「ここで待っている」と言っただけだ。

俺の知る教授なら、その言葉を鵜呑みにして、愚直に待ち続けるはずだ。

悠介は教授をすみからすみまで眺める。

間違いない。それが教授自身であることは確かだ。

しかし……何か変だ。

「教授」

「はい」

「俺が渡した鱗、どうされました？」

「鱗ですか？ もちろんあります」

そう言ってポケットから二枚の鱗を取り出す。

これも間違いなく、蛇神の鱗だった。

「本物ですね……」

「え？」

蛇神の鱗は複製などできない。

って、え　二枚？！

「教授、もう一枚は？　確か三枚渡したはずですよ」

「ええ。それが、あの　只君ですか？　どうも彼が一枚持っていたってしまったようで」

「只が？」

「はい。藤谷君の話ぶりから、何か大切かと思って持っていたんですが、いきなり奪われるかのように一枚だけ飛んでいってしまったので、おそらくは」

「……」

「あの……すみません。やはり問題だったでしょうか」

悠介は黙り込む。

別に只に奪われたのは問題ない。

あれは、幽霊が使ったところで役にはたたない代物だ。

問題はもつと別の所にある気がする。

先ほどから感じている不自然さ　。

しかし、何だろう。

教授自身も特におかしいところはなさそうだし……。

「え」

教授がおかしくない？

あの万年常春のーたりんが？

特におかしな所がないだって

！？

第32話「本物」

そうだ。それがおかしいんだ！

さつきからイライラせず「ごく普通に」会話できてるじゃないか。しごく真つ当に受け答えする教授なんて、それこそおかしいだろ。

そうだ。今の鱗の話だって、妙じゃないか。

すっかり物をなくすのはいつものことだとしても、「どうやら風に飛ばされてしまったようですねえ」ぐらい平気でのたまうのが教授だ。

それを、霊の見てない教授が、只の仕業だと冷静に見破るだつて！？

あり得ない。

天地がひっくり返ったってあり得ない。

「……」

いや、しかし、と悠介は教授を見つめる。

先ほどから教授しか知らないようなことを言っているし、仕草や表情などは間違いなく教授のものだ。

俺の気のせいなのだろうか？
それとも。

「ああ、クソ」

悠介は小さく舌打ちする。

こんな時こそ、蛇神がいれば「匂いがかがせ」られるのに。
歩く幽霊ホイホイの教授なら、蛇神を魅了するような香りがする
はずだからだ。

しかし、戸塚父に尻尾を食われてプライドを傷つけられたのか、
いくら呼んでも蛇神は返事をしない。

こちら先ほどのように暴走させるのが怖くてあまり強気に出れ
ないし……。

かと言って、俺がかいでみたところで、加齢臭しかしないだろう
しなあ。

悠介は眉をひそめた。

打開策が特に浮かばない。

困ったぞ。

気のせいだとして流すことは簡単だけれど……。

悠介は頭をかくと、教授の方に向き直る。

「教授」

「はい」

「本物ですか？」

「は？」

教授が口をあんぐり開けた。

「あなたは本物の教授ですかと聞いています」

「あの、藤谷君。おっしゃている意味がよく……」

「違っていたなら謝ります。俺にはどうも、あなたがいつもの教授

らしくないように思えるんです」

「……」

教授は口を閉ざしてしまう。

頭をうつむけて、ここからではよく表情が見えない。

「教授？」

「なぜ、そう思うのですか」

第33話「教授もどき」

悠介は目を見張った。

違う。

これは、教授じゃない。

震える拳を握りしめて、唾を飲む。

「それは……教授なら、そんな答えは返さないからだ」

「……」

「質問に質問で返すような高等テク、あの人にあるものか。同じ事を問われたら、なんでそんなこと聞かれたのかわからないって顔してオドオドするか、てんで検討違いの事を言って、こちらを脱力させるかどっちかだよ」

「……」

「お前、誰なんだ」

教授は、わずか沈黙する。

その口元がフツ、と歪んだ。

「いずれバレるとは思ったが、こんなにも早くバレるとはな」

うつむいていた頭をもたげ、前髪をかき上げる。

教授とまったく同じ顔をしながら、その目つきはさながら獲物を狙うハイエナのようなだった。

自嘲なのか、片眉を吊り上げ、皮肉気に笑う。

悠介は言葉を失った。

あまりに違う。

教授の姿でありながら、教授にはないものばかりの、似ても似つかない存在だった。

「よくわかったな。俺としては、かなり似せたつもりだったが」

「……うわ。本当に、別人かよ……」

「ハ。テメエが言い出したんだろ」

教授　いや教授もどきは立ち上がり机に腰かけると足を組む。
短足胴長の教授の体型だから、本来は格好つかないポーズのはずなのに、やけに堂に入っている。

「まあ、いいけどな。いつまでも天然ボケのフリは肩がこる。むしろさつさと見分けてくれて、感謝したいところかもな」

「は？　感謝？」

教授もどきは背伸びをして、一つあくびをした。

「だってこれで堂々と脅せるだろ」

「脅す!？」

「お前、この体、誰のだと思ってんだよ。まさか、このオッサンには双子の兄弟がいたとか思ってるわけじゃねえんだろ？」

「そ、それは……」

確かに、その可能性はかなり低いだろう。

だが、ということは……教授の体が誰かに乗っ取られていることを意味するんじゃないのか!？」

内心の動揺を見破ったかのごとく、教授もどきは片手で顎をいじりながら、不敵にほくそ笑んだ。

「そうとも。間違いなくこの体は、お前の大好きな八幡教授だぜ？」
藤谷悠介」

第34話「俺は今、キレている」

「野郎……」

「あんまりヘタな真似しようと思わない方がいいぞ。別に俺は教授様の体に傷が付こうが、どうなるうが構わないんだからな」

そう言っただけ教授もどきは自らの首を切る仕草をする。

悠介はキッと相手を睨みつけた。

「つまり、俺がお前の言うことを聞けば、教授の身は保証するといふことだな」

「ああ。話が早くて助かるぜ」

悠介は舌打ちする。

「さっさと言えよ。何が望みだ」

「その前に　立ち聞きなんてしてないで、堂々としてきたらどうだよ、「誠さん」」

教授もどきはドアに向かってそう叫ぶ。

悠介はとっさに振り返った。

黒ずくめの男が、扉の影から音も立てずに現れる。

その表情はまずいコーヒーでも飲まされたかのように苦味ばしっていた。

「……」

「ご機嫌ナナメって感じだな」

すると戸塚父は、いきなり空中を指ではじくような真似をした。
悠介の目の前を赤い光がハイスピードで過ぎていく。

「おわ!？」

教授もどきが体をのけぞった。

ちょうど数瞬前まで額のあった位置を赤い光球が過ぎていき、壁にぶち当たる。

ジュ、という嫌な音を立ててそれは消えた。

「な、何すんだよ!」

「やかましい。俺は今、キレている。國宏の口で、これ以上わめくな」

戸塚父は表情を変えぬまま、二度、三度と指をはじく。
その度に飛んでくる赤い光を機敏に避けながら、教授もどきは叫んだ。

「ちょ、おま……國宏に当たったらどうすんだよ!？」

「当てるように撃つてんだよ」

なにいいいっ!？」

まさか教授ごと攻撃するつもりか!

悠介は思わず前に出た。

「ちょ、ちょっと待て、戸塚父! キレるのはわかるけど、ちょっと落ち着いて!」

「お前よりは落ち着いてるよ、坊や」

「そうだろうけど……じゃなくて! ああ、もう言ってるそばから

攻撃すんなっ！」

淡々と戸塚父は赤球を発射していく。

教授としては奇跡的なまでに素早い動きで避けていたヤツだったが、早くも息切れし始めていた。

「ハア……クソ！ このオッサン、運動不足、にも、ほどがあるっ！」

顔を真っ赤にしながら、毒づく教授もどき。

そりゃ、教授の体だからなあ。

きつと5日後とかに筋肉痛が来るだろうな。

第35話「大嫌いだ」

そう、どこか他人ごとのように見ていたのがいけなかったのか。
いきなりガシツと肩が固定される。

何かと思つて振り返れば、教授もどきに背後から羽交い締めにされていた。

「え」

「ハアツ 疲れた。盾にさせてもらうぜ」

「ええ！？ 何すんだ、この野郎！」

ジタバタあがくも、しつかり掴まれ、逃げられない。

くっそー！

教授の腕力なのに、振り切れないって屈辱だ。

しかも戸塚父はそれを見て、特に何もためらう様子もなく攻撃を続ける。

もちろん 俺ごと教授もどきを打ち抜く気満々で。

「ぎゃああつ！ 当たる、当たるから離せ、エセ教授！」

「ふざけんな、離れたら俺に当たるだろうが！」

「ふざけんなはこっちのセリフだ！ テメエ、教授の どわっ！
？」

言い争う間にも、容赦なく光球は飛んでくる。

なかばマトリックスのような体勢でかわしながら、悠介は教授もどきを罵った。

「教授の 体で、好き勝手しやがって！ その顔で口汚いセリフ吐くんじゃねえよ！」

「じゃあ何か。優しーく「藤谷君。お願いします。守ってください」
とでも言えば、満足かよ」

「う……」

「藤谷君」以降を、急に教授の口調で言われ、一緒悠介は言葉につまる。

が。

「それはそれでムカつく！」

「結局ダメなんじゃねえか！」

ヒュン、と目の前を赤い光が走っていく。

ヤバイ、今髪の毛の二、三本焦げたかも。

「ちょ……戸塚父イッ！ 一応俺も被害者なんだから、もうちょつと遠慮して撃ってくれよ。マジで当たるだろ！？」

「阿呆か。別に当たっても構わないから撃ってんだよ、坊や」

「この人でなしいい！ 鬼、悪魔あつ！」

「あのなら。だから俺は人間だったの」

「今のは言葉のあやだ！ いちいち言葉尻をとらえんな」

「そうかい、そうかい」

どうでもよさそうにつぶやく戸塚父。
いつそ殺意すら湧いてくる。

畜生、どうして俺の周りは、こんなろくでなしばかりが集まるんだ。

「チツ、盾にも人質にも使えないのかよ。ありえねー」

背後では教授もどきが舌打ちする。

クソツタレ、みんな大嫌いだ！

「どいつもこいつも　！」

悠介は怒りにまかせて、教授もどきを振り切った。

教授の体であることも忘れて、その顔面に拳をお見舞いしようとした。

が。

唐突に足から力が抜け、地面に膝をつく。

「うあ……っ！？」

第36話「畏」

悠介は寸前、教授もどきの服を掴み、なんとか倒れはしなかったが、足がガクガクして力が入らない。

立ち上がろうとしても、膝から下が思うように動かないのだ。

「な、何だ……!？」

全力疾走した後のような疲労感が襲う。

まるで誰かにエネルギーを吸い取られているかのように。

「力が……入らな」

体が前傾姿勢を取っていく。

頭がクラクラした。

そんな悠介の手を振りほども、教授もどきが鼻をならす。

「やっと効いてきたか。あんまり時間がかかるから、効いてないのかと思っただぜ」

悠介はぼんやりと見上げた。

ふと、鼻腔を甘ったるい香りがつく。

息を深く吸い込むと、肺の奥まで広がった。

どうやら香りの主は教授のようだが、何だろう。

ひどく 美味そうな匂いだ。

やみつきになるとうっか……そう、例えるなら麻薬のような常習性を感じる。

麻薬なんてやったことないけど。

「変な……匂い」

「美味そうだろう？　八幡センスの妖怪フェロモン全開にしてっかな。蛇神の器のお前にはかなりこたえるはずだ」

教授もどきの言葉に悠介は納得する。

そうか。

これが教授の「幽霊ホイホイ」の原因か。

確かに、この香りにつられて寄ってくる幽霊や妖怪がいたとしてもおかしくない。

近寄りすぎると力が抜けるというオプシオンがあるとは知らなかったが、それであのホエホエした教授でも襲われることなく、生き延びられてきた説明にもなる。

だが、と悠介は同時に考える。

なんで今、そんな事をする必要があるんだ？

フェロモンが効くのは幽霊や妖怪の類だけだろう。

自分は蛇神と半ば同化しているから効果はあるが、今攻撃をしているのは戸塚父　人間だ。

人間に効かなければ意味がない。

まさか俺を人質にするわけでもないだろうし……。

「……」

戸塚父は怪訝な表情のまま、攻撃の構えを続ける。

それでも先ほどのようにポンポン攻撃しないのは、自分と同じく

相手の意図が読めないからだろう。

三者が互いに牽制し合うかのような、奇妙な睨み合いが続く。

最初に沈黙を破ったのは戸塚父だった。

「……で、何がしたいんだ、お前は」

そう言われた教授もどきは一瞬、驚いたような表情をした。
だが次の瞬間にはクツクツ笑い出す。

「気づいてないの？　こんだけ近くにいて」

「近く？」

「は。案外ニブいんだな、アンタら。ちつとは周囲に気を配ってみれば？」

「だから何を言って」

ミシッ。

突然、壁が軋んだ。

第37話「正しい教授の使い方」

戸塚父がハッとして、後方を振り返る。

「しまった……！」

その言葉につられ、悠介も入り口を振り返った。
あとで見なければ良かったと後悔したが。

「……うわ！」

そこにはいた。

教授のフェロモンに誘われた　有象無象の幽霊たちが。

悠介が気絶している間に戸塚父が張ったのだろっ、簡単な造りの
結界がミシミシ音をたてている。

数にすれば、百は下らないだろう。

これではいつ結界が壊れてもおかしくない。

「な、何、コレ……！？」

悠介は驚愕に口をパクパクさせた。

思わず教授の服の裾を必死につかんでしまう。

「圧巻だろ？　校内の全ての幽霊妖怪どもがここに集まってるんだ。
教授様の体はこういう使い方もあるって事だな」

「お、お前。こ、こんなことして何考えてんだ！？」

「ん？」

教授もどきは悠介を見下す。

「何って」

「だって、もし結界が壊れてみる。真っ先に狙われてんのはフェロモン出してるお前だろうが。なんだって、そんな自分を危険にさらすような真似……!？」

「だーかーらー、アンタも今体感してんだろ。教授に近づいた幽霊妖怪は力が入らなくなるの。おわかり？」

「そ、それはそうかもしれないけど……でも、蛇神はすぐに効かなかっただろ！ 他にそういうヤツがいたら、どうすんだよ。教授が食われちゃうんだぞ！」

悠介は悲痛に叫ぶ。

だが、教授もどきは意に介したようすもなくあくびをした。

「なんねーよ、そんな事には」

「ど、どういう」

「あーもー、さっきから質問ばっかでうつせえな。

説明してやれよ、誠さん」

教授もどきは戸塚父を見ながら頭をかく。

脂汗を流しながら、必死に結界を維持しようとしている戸塚父が無言で睨んだ。

「……っ」

「アンタら戸塚家の人間が、八幡國宏教授を見殺しにできるわけねえもんな。命に代えてでも守ってくれるんだろ？」

「黙れっ！」

戸塚父が激昂する。

しかしその瞬間、わずかに気が緩んだのか、結界がミシミシミシッと圧迫される。

「クッ……！」

「はは、いい気味。そうやって全力で守ってくれよ」

戸塚父は視線だけで人が殺せるなら、一瞬で焼き付くせよのような苛烈さをもって教授もどきを睨みつけている。

だが、今は結界を守るだけで精一杯なようだった。

悠介はわけがわからず、混乱する。

「いや、待てよ。だってさっきまで戸塚父は、赤い玉みたいなので教授ごと攻撃しようとしてたじゃんか。なんで、命に代えても守るなんて」

「攻撃？」

戸塚父が眉をひそめる。

第38話「剥離」

「あれが攻撃なわけないだろう……っ、本気で消す気ならあんな下級霊、一瞬でやっている」

ああ、それは同意。

「あの玉は離魂球。その名の通り……クツ、魂を体から引き離すものだ。」

憑依してすぐならさほど体に根付いてないし、元々他人の魂だ。ちよっとのきっかけで、すぐ離せると思ったんだがな……！」

グアン、と重低音が響く。

戸塚父の両腕が圧力で震えていた。

「ぐうつ！」

教授の体から放たれる香りが、より濃度を増す。

もはやむせかえりそうな程の濃さで、部屋中に充満していた。

その中心で、教授は例えるならそう　毒花のように笑みをたたえている。

「それで俺だけ滅するつもりだったんだろうけど、残念だったな。時間切れだ。」

その藤谷のボーヤが邪魔しなきゃ、もしかしたら間に合ってたかもしれないかったけどな」

「え、俺のせい?!」

教授もどきがこちらを見る。

戸塚父もこちらを見る。

二人は同じタイミングで視線を逸らした。

「……まあ、いい。」

とにかくいまや立場は逆転してんだ。少しは話を聞こうって気になっただけでした、誠さんよ？」

茶化す教授もどきに戸塚父は吐き捨てる。

「黙れ下種」

「おー怖い怖い。別に取って食おうってんじゃねえんだからさ、そんな目で睨むのやめてもらえる？」

こっちはアンタらを襲ってるほどヒマじゃないんでね」

「……は？」

「時間がない。じゃなきゃ人間なんかに頼まねえよ」

戸塚父は初めてまともに、教授もどきの顔を見た。

「……どういう、意味だ」

「やっと聞く気になった？」

「今すぐ、この周りの霊どもを呼ぶのをやめれば、考えんでもない」

「そうすると、アンタ、俺を襲うじゃん」

「……………」

戸塚父は否定しない。

妙な所で真面目というか、正直というか。

しかし互いに譲らないこの状況じゃ、話が先に進まない。

悠介はだんだん面倒くさくなってきた。

「……話ぐらい聞いてやったら？」

「坊や」

「なんかよくわかんないけど、戸塚父は教授を守んなきゃいけないんだろ。だったら、教授を人質に取られてる以上、どうしようもないんじゃないの」

「……國宏のフェロモンに当てられたか」

悠介はムツとする。

「俺だって、教授のツラして好き勝手やってるコイツ、ム力つくけどさ。」

でも、じゃあ何やったかっていえば、教授に憑依しただけだろ。命狙われたわけでもないし、事情もありそうだし、ぶっ潰すにしたって話聞いてからでも遅くないんじゃない」

戸塚父は不満そうだ。

だが、先ほどより険悪さが和らいでいる。

「それでも、どうしても今すぐ叩き潰したい？」

「……いや。いいだろう。坊やに免じて今は見逃してやる」

第39話「鬼ごっこ」

戸塚父が嫌々ながらも承諾したのを見て、教授もどきはソファに大仰に座る。

やっぱり態度のデカイ教授って気持ち悪い。

「じゃーま、色々あったけど、一応話はついたということで。OK？」

「オイ、それはいいが、さっさと周りの霊どもを」
「要件は一つ」

教授もどきは、人差し指をピツと立てる。

セリフを途中で遮られ、戸塚父のこめかみがひくつくのが見えた。わずかに口が開き、言い返すのかと思った瞬間、教授もどきがささず言葉を次ぐ。

「アンタ方には、鬼ごっこをしてもらおう」

その一言を理解するのに、約三秒かった。

.....は？

「鬼ごっこお？」

悠介は素っ頓狂な声を上げた。

戸塚父も「何言ってるんだコイツ」と表情で語っている。

「いや、逆か。人間が鬼を追うのだから、逆鬼ごっこだな」
「いや、意味わかんないんだけど」

「鬼を捕まえろつつってんの。言葉通りの意味だ」

悠介は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……鬼って、パンチパーマに角生えてて、虎柄のパンツはいた？」

「いつの時代のイメージだよと言いたいが、ま、そうだな」

「……それって、ようするに鬼退治じゃないのか」

「退治じゃない。生かしたまま俺の目の前に連れてこい」

教授もどきはフンと鼻を鳴らす。

鬼、鬼ねえ。

悠介は先ほどの少女の人鬼を思い出す。

おそらくだが、あの人鬼は鬼になって日が浅い。鬼としての力なら、かなりレベルの低い方だろう。

しかし　その弱小鬼ですら、あの威圧感、あの気迫。

人間がまともに戦って勝てる相手ではない。訓練を積んだ退魔士だって、鬼には四〇五人で襲いかかって、ギリギリ勝てるか否かだ。

それを、生け捕りにしろだあ？

「余計に難しいわああっ！」

悠介は思わず机をバンバンバンと叩く。

「無茶言っな！　人間が鬼に勝てるわけないだろ！」

「別にお前だけでやれとは言っていない。あそこの「異界を食む者」とやればいいたろう。あれは人間としては十分規格外だ」

「でも　っ」

なおも反論を続けようとする悠介に、教授もどきが手を伸ばす。そして下顎を掴まれ、無理やり顔を近づけさせられた。

「逆らえる立場か、人間」

噛みつかれんばかりの距離で、教授もどきが牙をむく。

「答える。お前は逆らえる立場か」

「……っ」

「ちなみにイエスという解答は認めない。ノーかノーで答える」

第40話「空気は読めても、気は読めず」

悠介は齒噛みする。

「……わかったよ」

「そこなくっちゃ」

教授もどきは嫌らしく、したり顔を浮かべた。

「んじゃま、そろそろお互いの立場も理解できたようだし……」

そう教授もどきがつぶやくと、甘い芳香が一気に消え、部屋を覆っていた圧迫感から解放される。

妖怪フェロモンの放出を止めたのだ。

悠介は足腰に力が戻るのを感じた。

戸塚父も型を解き、汗を拭っている。

「本題に入ろうか。」

お前らに望むのは、ある鬼を生きたまま、俺の目の前に差し出すこと。どうだ、簡単だろ？」

「はあ……で、その鬼っていうのは？」

「？」

教授もどきは首を傾げた。

「鬼は鬼だ」

「そっじゃなくて」

悠介はため息混じりに説明する。

「特徴だよ。性別とか、背が高いとか、年はいくつとか……せめてヒントがないところからも探しようがない」

「お前、馬鹿か」

「は？」

「もし奴が人間に憑依していたら、そんなのいくら聞いてもわからねえだろ。」

「というか、十中八九憑依してる。ヒトの面被っていた方が、何かと便利だからな」

「便利……」

そんな理由でヒトの体に乗っ取るのかよ。
悠介は腹の中がモヤモヤするのを感じた。

「だから探すなら、気で探せ。気で」

「あーはいはい。わかったよ。気ね。気で探せば　　気!？」

「他に何で探すんだ」

さも当然とばかりに教授もどきは言い放つ。

「ちよ。ま、待て。人間に気は探れない」

「何故」

「探れないというか、わからない。気なんてものは、感知できないんだよ。人間の能力じゃ」

「何？」

教授もどきは不快感を露わに、眉を寄せる。

「じゃあ、どうやって探すんだよ」

「それをさつきから聞いてたんだって」

「……」

「……」

沈黙が場を支配する。

「なら、この付近の鬼、全部俺の前に連れて来い」

「無茶言うな！」

悠介の声は悲痛だった。

しかし、教授もどきも譲らない。

「この際手段は問わねえ。とりあえず、なんとかしてでも奴を生け捕りにしろ。」

それが出来ねえなら、この教授様が死ぬだけだ」

教授もどきは、自らの首を指でかき切る動作をする。

「……っ！」

「わかったな。」

なら俺は寝る。鬼を捕まえたら起こせ」

「は、おま、何言っ」

だが、悠介が抗議しきる前に教授の意識が落ちた。
頭がガクリと倒れ、ソファに沈没する。

「教授！」

第41話「上トロと親近感」

とつさに悠介は教授に駆け寄る。

脈を取って、呼吸が正常なのを確認すると、安堵してヘナヘナと座り込んだ。

「寝てるだけだ……良かった」

憑依のし方によっては、教授のエネルギーを吸い尽くされ、ついには衰弱死する可能性もあった。

だが幸い、あの教授もときはそういう憑依はしていないらしい。

「っはあ」

張り詰めていた神経をわずか緩めると、悠介は天井を仰ぎ見た。

「何なんだ、今日は。次から次へと、ろくでもない来客ばかり」

つい数時間前までは、授業を受けて、戸塚とだべって、教授に振り回されてという日常があったはずなのに。

平和って脆いんだなあ。泣きそうだ。

「おい、坊や」

声をかけられ、悠介は首だけそちらに向ける。

戸塚父もかなり疲弊しているようで、床に座りながら大粒の汗をぬぐっていた。

「何スか」

「これからどうする気だ。あの忌々しい憑依野郎の言うことをきくにしたって、準備が必要だろう」

「そうですねえ」

とは頷くものの、正直頭が回っていない。

「んーまあ、とりあえず鬼を見つけないことには始まらないんじゃないですか」

「心当たりは？」

「まったく」

生憎と鬼に友人はいないもんで、と悠介はヒラヒラと手を振る。

戸塚父の舌打ちする音が聞こえた。

「まったく、國宏のヤツ、毎度毎度面倒ごとに巻き込まれやがって。しかも本人に自覚がねえんだから、始末が悪い」

「同感です」

まあ、自覚があつたらあつたでぶん殴りたくなるが。

「自分が危機管理能力がゼロなんだってこと、もっと認識して頂きたいですよ。」

やれ幽霊だ、妖怪だ、目を輝かせて。

そんな良いもんでも、面白いもんでもないっつーの。

これだから、見えない連中はお気楽というかなんというか」

戸塚父は深く頷く。

「全くだな。興味半分でこっくりさんをやってる学生を見ると半殺しにしたくなる」

「そう！ ホントですよ！

失敗してるならまだしも、なまじ中途半端に形式を踏んでると、辺りのどうしようもない下級霊がウヨウヨやってきて」

「ああ、せめて「何かおかしいな」ぐらいは気付ければ、まだ対処のしようもあるが……」

「ないない。大概放置ですよ」

「ったく、誰が処理すると思ってんだ。あんなの食っても不味いだけなのに」

戸塚父が苦々しく吐き捨てる。

「へえ。やつぱり、不味いんですか、アレ？」

「食べたもんじゃねえぞ。固いわ、味はしねえは、まるでゴミ食ってるみたいだ。

美味さは靈力に比例するからな」

「ふーん」

「その点、蛇神クラスだと　そうだな。上ト口並みくらいには美味い」

「上ト口……」

なんかわかるようなわからないような例えだ。

第42話「同盟」

「そういえば」

悠介はつぶやいた。

「お腹、すいたな」

かろうじて被害を免れていた壁時計を見れば、ちょうど夜九時をまわったあたりだった。

教授の研究室に来てから、せいぜい一時間程度だと思っていたが、予想外に気を失っていた期間は長かったのだろう。

せっかく用意した柏餅も食べそこねてしまったし、鬼に追いかけられたりなんだから、今日はくたびれた。

ぐう、と腹がなる。

それを見て、戸塚父が呆れとも賞賛ともつかないコメントをした。

「……将来、大物になるよ、お前」

「はあ。俺、一日五回食べないと倒れちゃうんで」

「運動部の高校生か」

そんなことはない。

高校時代は一日七食だった。

しかも帰宅部で。

と言い返したら、どんな顔をするのだろうかと思いながら、悠介は戸塚父のツッコミを黙殺する。

「でも……この時間だと学食も閉まってるだろうし。」

マクドもなあ、遠いんだよなあ」

大学というのは大概広い土地が必要で、この日本で広い土地がある所など、不便で駅からほど遠い場所に決まっている。

当然、そんな辺鄙な所に店を設けても儲かるわけがないので、必然的に学生は駅前の栄えている方へ足をのばさなければならないのだ。

資本主義社会の小さな理不尽に、悠介はため息をつく。

「これから帰るわけにもいかないし。するとコンビニ飯か……」

「出前でも取ればいいだろうが」

「奢ってくれるんですか？」

戸塚父は「なんで俺が」とでも言いたげに、睨みつけてくる。

「でしょ？ 奢りでもないのに、出前なんて割高なもの、貧乏学生が頼めるわけないじゃないですか」

「じゃあ、ウチ来るか？」

「貧乏学生に何言って……え？」

なんだって？

「この時間なら、ちょうど夕飯もできてる頃だろう。ウチのやつは、食卓の人数が一人二人増えようが、文句を言うようなケチな女じゃないしな」

「え、あ、いや。ちよつと」

「気にするな。男所帯だから、量が足りないなんてことはない」

「いや、そーゆうことじゃなくて」

じゃあ、どーゆうことなんだと問われれば、きつと答えに困るんだろうけど。

なんだ？　なんでこうなった？

「雪菜の飯は美味いぞ、坊や。期待しとけ」

「はあ」

悠介の混乱をよそに、戸塚父はケータイを取り出し、電話をかける。

口調から察するに、相手は奥さんだろう。

「ああ。急で悪いんだが　え？　いや、そんなこと気にすんなよ。適当で……ん？　明人の友達。そうだ、國宏も連れてくから。うん

ああ、よろしく」

折りたたみ式のケータイを、パチンと音をたててしまうと、戸塚父は告げた。

「決まりだ。許可が出たぞ」

「……俺、行くなんて一言も」

「行かないとも言ってないだろう。それに、飯を食わすためだけに呼んだんじゃない」

悠介は言外に問う。

それに気づいてか、気づかないでか、戸塚父は眠りこけている教授に近寄ると、その頭をパシパシと叩き始めた。

「坊やには、一時的に同盟に入ってもらおう。　おい、國宏。起きろ、飯だ」

「同盟？」

教授を起こしながら、戸塚父は器用に悠介と会話する。

「ああ、同盟者にしか明かせない情報もあるからな。俺が蛇神
うんぬんを知っていたのも同盟からの情報だ。まさに蛇の道は蛇、
ってやつだな」

第43話「安穩」

面白くない冗談だ。

だけど、気にならないと言えば嘘になる。

悠介は尋ねた。

「同盟つて、強制ですか」

「いいや？ 来る者拒まず、去る者追わず。まあ、脱退者に守秘義務はあるけど、別に破ったって罰則があるわけでもないしな」

「じゃあ、いいです」

戸塚父がこちらを見る。

なんというか、すごく微妙な顔をして。

「頼むから、日本語は正確に使ってくれ。いいですって、良いのか、悪いのか」

「良い、の方ですよ。俺もあなた方に聞きたいことはあるし、逆にあなた方も俺に聞きたいことがあるんでしょう？」

同盟がどんなものかは知らないが、戸塚父の口振りからすると、情報交換が目的の一つではあるようだ。

これ以上わけも分からないまま、振り回されるのはゴメンだし、脱退も自由なのだというなら、拒む理由もない。

しかし、何より気になるのは、「誰が」門外不出のはずの蛇神の情報を漏らしたかということだ。

しかも俺が継承者だつてことまで知られてるってことは、そもそも継承者がどんなものかってバレてるってことで。

ということは、下手すると「継承の儀」まで知られてるかもしれ

なくて……。

う。

うああ、ヤバい！

あんなモンが世間一般様に知れ渡ってたら、俺、恥ずかしすぎて生きていけない！

あああ、思い出したくもない、あの儀式！

女の子ならまだいい。いや、女の子でも嫌だろうけど、でも、

やっぱり男でアレはない！

藤谷家内々の秘密だから、これまで耐えてきたようなものを。

だああ、クソ！

どこの誰がどんな目的でバラしたのか知らないが、絶対見つけ出して、問い詰めてやる！

「……なに、一人で百面相してるんだ、坊や」

戸塚父の言葉にハツとなる。

「あ、いや。ちょっと宇宙と交信しました」

「電波か、お前は」

まあ、いいけどな。どうでも。と付け加えて、戸塚父はいつまでも起きる様子のない教授を蹴り飛ばす。しかし、それでも教授は夢の中だ。

あの人は一度寝ると、起きるという行為そのものを忘れるからなあ。

ん？

ちよっと待て。蹴り飛ばすだって！？

「ちょ、ナチュラルに何やってんですか！ 思わずスルーしてここでしたよ！」

「いちいちやかましいヤツだな。國宏はこのくらいじゃ起きやしねえよ」

「だからって、蹴り飛ばすことないでしょう！？」

悠介は慌てて、教授の蹴られた辺りを探る。

加減はされているのだろう。特にケガらしいケガはなかったが、それにしても心臓に悪い。

悠介は重く息を吐く。

「そんな乱暴にしくなくても、教授を起こす方法がありますよ」

「あ？」

「見ててください」

訝しむ戸塚父を背に、悠介は教授の耳元に囁いた。

「教授、起きてください。妖怪ぬりかべが出ましたよ」

悠介の声はさほど大きくはない。

しかし、その一言で、教授の目がパチリと開いた。

「！？」

背後で戸塚父が安然としている気配がする。

教授は上半身を起こすと、辺りをキョロキョロ見回している。

「ぬり壁」

「教授」

「藤谷君、ぬり壁はどこでしょうか」

「……残念ですが、たった今消えてしまいました」

一瞬、教授は言葉の意味を飲み込もうと、悠介を凝視する。
そして三秒後、がっくりと肩を落とした。

「そうですか……消えてしまいましたか」

しゅんとするその様は、まるで雨の中の捨て犬だ。
自分でやっというてなんだが、悠介は若干、良心の呵責を覚えた。
ちよつと気まずくて、悠介は無理やり話題を変える。

「そ、それより教授。お腹すきませんか」

「そうですね。そんなような気も……たしか、朝は食べたと思うんですが」

「は？」

「ちよつと覚えてないですねえ」

待て。意味が全然わからん。

確かに、教授だ。このトンチンカンで、人を思わずイラッとさせる回答は間違いなく本物の教授だが、本物なら本物で、また手間がかかる。

「え、えと……それは」

「國宏！ お前、また昼抜いたのか。あれだけ一日三食は食えつつたろ！」

ああ、戸塚父、通訳ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485j/>

蛇神

2010年10月8日15時02分発行